

付

録

唐物語の語彙について

—

唐物語は二十七話から成っており、大抵は一話に一首の和歌が詠み込まれているが、第八話の「野々」と、第十話の「徳言」が二首の和歌を含み、第十八話の「楊貴妃」に至っては、話が長いこともあって、和歌が八首も詠まれているので、併せて、三十六首がこの物語に含まれる全歌数になる。しかし、唐物語の本文をA・B・Cの三類に分けて考えたと、き、A・B両類については共通して言えるのであるが、C類では、第二十三話の「荀爽」にもう一首を加えることになるので、それは三十七首に及ぶであろう。そして、この僅か四十首足らずの歌を通覧してみると、同一の初句を持つ例が四首もあるのに驚ろかされる。校本に従って、A類本は尊経閣文庫蔵本、B類本は宮内庁書陵部蔵本、C類本は清水浜臣校本を以下引用していくが、まず、A類本に依りこの四首を示してみよう。(濁点のみ私に施す)

もろともにつきみんとこそいそぎつれかならず人にあはむものかは (第一話・王子猷)

もろともにみしにひかりやまさりけむいまはさびしき秋の夜の月 (第八話・野々)

もろともにかさねし袖も朽果ていづれの野への露むすぶらん (第十八話・楊貴妃)

もろともにしききてやかへらましうきにたえたる心なりせば (第十九話・朱買臣)

唐物語各話は、舞台が中国とは言え、世の常として、男がでてきて女が出てきてどうかする、という話が多いか

ら、「もろともに」で始めようと思えば、いずれの主人公の口を借りても容易に詠み込まれる筈ではあるが、それだけに、意図したのではないのなら、四首も同じ言葉で連ねられるのは、いささか曲がないと言って良いであろう。その上、これとは逆に、同じ句で終る歌がまた二首ある。

いにしへにありへしことをつくさずは袖になみだのかゝらましやは（第二話・白楽天）

なさけなきことの葉ならばけふまでも露のいのちのかゝらましやは（第二十二話・莊王）

以上六首の歌は、B・C 両類の本文で見ても、「もろともに」「かゝらましやは」の同一句部分に関しては、全く変りがなく、他も語句に若干の異同を見るに過ぎないが、A 類本のみであれば、次の場合もそうである。

なにせんにたまのうてなをみがきけん野辺こそつゆのやどりなりけれ（第十八話・楊貴妃）

しらざりしたまのうてなをしりえてぞよ半のけふりと君もなりにし（同）

B・C 類では、後の歌の第二句が「たまのありかを」となっているので一致しなくなるが、尤もこれは、「玉」と「魂」が微妙に係わり合っている。このように、もし各類の本文異同にも留意するなら、B・C 類のみの本文では同一初句を持つ次の二首をも例示することができる。B 類本であげよう。

みるたびに恨ぞふかきから衣たちし月日をへだつとおもへば（第八話・昶）

みるたびに涙露けきしら菊の花もむかしや恋しかるらむ（第十四話・陵園妾）

A 類本では、第十四話の初句が「みるたびも」とあるのが一致しないだけで、あとは一言一句、B・C 類と異ならない。

以上の用例を並べたてたのは、唐物語作者の表現が、一つの類型に拘束され過ぎてはいまいか、という危惧を抱かせるとともに、それが語彙ボキャブラリーの上にも表われるのではないか、と思っただからである。また、それが唐物語本文の系統を異にする面で、それぞれに特徴が見られるのではないか、とも思った。この物語は、中国説話の翻訳であるから、

いわゆる直訳体でないにしても、原拠の漢文に自然密着した部分があるのは否めないが、そうした制約の中で、この作品の語彙がどういう特質を持ちうるかにも興味があった。古典作品の総索引の刊行が活況を呈しているので、他との比較も容易に行なえるかとも思った。唐物語総索引を作ってみた所以である。

二

唐物語の異なり語彙数は、一八六六語であった。この程度の規模の作品で、これが果して語彙の豊かさを示すのか、或いは貧困さの意味するのかは俄かに断じがたい。大体、作品量を何によって計るのかも、一定しているように見受けられない。大雑把には頁数が用いられ、同一作品内各巻各篇の分量比や、異なる作品の場合でも、同一叢書間のテキスト同士の比較ではほぼ有効であろう。そこで、組方の異なるテキストでは活字数を集計することになるが、古典作品の場合、原本の表記や、校訂者の恣意によって漢字の当て方に数量的相異ができ、それを修正する必要が生じる。ついで音節数ということになる。音節数も、現実に人の手で数えるとなると、何万、何十万、時に百万をも超える音節数を持つ作品などでは、幾ら必要とは言え困難を感じる。従って、まず活字数を集計し、作品量にに応じて、無作意に十頁なり、数十頁なりを抽出した上、それらの各音節数を実測して、それぞれの活字数との割合を求め、一つの方法になる。即ち、その割合の平均値と作品の総活字数から、総音節数の概数を計算するのである。この方法で、私は嘗て幾つかの作品の音節数を計算したことがあった。^{註1}唐物語に抱いたのと同じように、当時、浜松中納言物語に対しても、類似した表現の繰り返しが目立ったので、私にとって作品量である総音節数を求め、それと異なり語彙数との函数関係を求めようとしたのである。^{註2}そして結局、浜松中納言物語と夜半の寢覚という、作品形態、成立年代も同一であり、作品量もそう異ならない二つの物語の間で、稻賀敬二氏^{註3}の調査によれば、共通語が各異なり語彙数のほぼ半分に達するという事実を基礎に、作品量が二倍になると、異なり語彙数が一・五倍になるといふ仮説を立

てた。はじめ、浜松中納言物語を基準に、それぞれの作品量がその何倍か、或いは何分の一倍かを計量し、右の極めて単純、素朴な仮説に基づいて計算してみると、諸家から報告されている幾つかの作品の異なり語彙数とこの計算値とが、驚く程一致することもあった。そこで、それぞれの作品量を、浜松中納言物語の何倍かという数値で求める煩わしさや坐りの悪さを是正し、一方、量の最も大きい作品を基準にした方が、誤差を拡大させないと考えて、大野晋^{註4}氏の集計した源氏物語の異なり語彙数一四七〇〇語を基礎に次のような関係式を想定してみた。即ち、源氏物語の総音節数が約一〇二万と推定されるので、その一〇二分の一、一万音節の作品を仮想した場合、その異なり語彙数は九八二語と計算されることから、X万音節の作品の異なり語彙数Vは

$$\log V = 2.9920 + 0.5850 \log X$$

になるとしたのである。そして、この式によって数作品を試算してみると、浜松や寢覚という物語は実測値と計算値がほぼ一致するほか、歌集でも、古今集、新古今集では両者が近似するものの、万葉集や、枕草子では実測値が相当に上回って合わないし、短い作品である紫式部日記や更級日記でも、実測値が高くなってしまった。唐物語の総音節数は、ほぼ二八一〇〇となり、右の数式を用いると異なり語彙数は一七九七語と計算されるので、実測値一八六六語にまずは近くなると言えるであろう。しかし、嘗て私が提示した方式は、その後、浅見徹氏^{註5}によって「まだかなり問題は残るが、五割という数値は或る程度の目安にはなるであろう。とはいえ、池田氏自身も触れているように、作品の絶対量の大小如何にかかわらず、一・五という定数を設けたことは、いささか素朴に過ぎるくらいはある」と好意的な裡にも批判された通り、問題を残し過ぎてしまった。それに取り組み直す程の用意は依然として欠けているのであるが、この点について考えていることを二、三述べてみたい。

第一に、作品量を音節数によって計量して良いかが問題である。作品は数多くの文によって構成され、文は単語の集積により成立している。理論的に言えば、作品量は、その内臓する単語数、つまり延べ語彙数の多寡によって測定

するべきではあろう。一単語当りの音節数は、一音節語から多音節語までの幅があつて、これは複合語の認定基準によつても大きく左右される。この弾力性は、作者、時代、作品形態などによつても差異が生じようし、二次的には品詞構成や、漢語・和語の割合如何によつても影響を受けるであらう。そうした弾力性のある総音節数を基準にすることが、そもそも不都合であるには違いないが、延べ語彙数というものは、その作品の総索引を作成する中で求められることが多い。従つて異なり語彙数も実測しうるわけで、私が問題にしたのはそれ以前の状態に關してである。目前の作品のあるべき異なり語彙数を概略推定したいのが出发点で、その限りでは便宜的方法であるが、實際的方法と言つても良い。便宜的な中では、本文の頁数よりは文字数が、文字数よりは音節数が比較の上で確度が高まると考えられる。ただ、その場合の、総音節数と延べ語彙数との比例關係にどの程度の誤差があるかが、音節数で作品量を測定する際の振幅になるであらう。そこで、既に算出され、報告されている総語彙数(延べ語数)と、私が計算した各作品の総音節数との比例直線上でのゆれを見たいのであるが、付属語をも含めての総語彙数が報告されている例は乏しく、管見に入つた古今集註。と平家物語註。とで見ると、前者では助詞三四・七%、助動詞一一・四%の合せて四六%、後者でも、二九・五%と一一・〇%との合計四〇・五%に達している。自立語のみの延べ語彙数は諸家によつてかなり報告されているが、古今、平家という、時代も形態も懸隔のある作品であるとはいへ。付属語の割合にこれ程の相異があるのは、自立語の側から見直せば、五四%と五九・五%との相異で、古今集を基準にしても、付属語の多寡による自立語延べ語彙数の総語彙数に対するゆれは九・八%にもなつてしまふ。自立語のみの延べ語彙数で作品量を測定するのも、また考えものであらう。諸作品の新たな算出値が報告されるのを待ちたい。

次に、ゆれを問題にするなら、異なり語彙数にしても、実測者の単語認定方法の相異から、同一作品について報告される実測値に余りにゆれが大きいことも取り上げねばならない。さきに私が基準に用いた源氏物語についての大野晋氏の異なり語彙数は一四七〇〇語(一四六八八語)であつたが、自立語のみでは、角井英子氏註。によれば二〇二六

六語、宮島達夫氏^{註9}によると一一四二三語であるという。異なり語彙数であれば、付属語は百たらずであろうし、割合も、古今で三・四%、平家で〇・八%と、作品量が大きくなる程小さくなるので、源氏のような作品で1%以下になるのは当然であり、以上の三者の相異は、そのままの数値で比較しても、実体と大差ないであろう。三様それぞれに差異が生じるのは、ここで検討するまでもなく理由のあることなのではあるが、一口に「異なり語彙数」とか「異語数」と呼ぶ際のわれわれの認識が、主として文法論上の問題から、余りに変動があつては、語彙論上の多くの議論も、前提である単語の認定方法をめぐる問題にとかく戻りかねない。宮島氏は、「総索引への注文」と題する一文で、同じ索引の内部にすら方法論上の混乱が見られることを指摘し、まして諸索引間に於てその著しいことを歎かれたが、索引を作る側をも含めて、総索引類が出揃い始めた今日、国語学界の中で、「異なり語彙数」と呼ぶ際の認識に、或る程度のコンセンサスがえられる方法の確立を期待したのである。

そこで、現状では、いろいろの人がそれぞれに実測した異なり語彙数を、そのまま横に並べて同日には論じられないことになるので、同じ基準で算出された多くの作品の語彙数がわかれば好都合であり、そうした望みがある程度叶えられるのが宮島氏の「古典対照語表」に示された統計表である。そこには、古典十四作品の自立語異なり語彙数も示されており、私のさきの数式に用いた源氏物語の大野氏の異なり語彙数、一四七〇〇語は、宮島氏の一一四二三語に付属語を加えた概数、一一五〇〇語程に置き換えて考え直すのも良いであろう。しかし宮島氏も述べているように、この数値も氏の方法による補正が加えられた結果で、補正前では一四二〇六語であるから、大野氏との間に殆んど相異がないことになろう。

一方、私が基本原理としていた、作品量が二倍になると、異なり語彙数が一・五倍になるといふ、いささか大雑把な仮説も再検討を要するであろう。私の考えは、二つの作品を一作品と見做すと、異なり語彙の和から、両作品間の共通語彙を除いた数値によって新たな異なり語彙数が求められるという単純な論理に成り立っている。そこで、浜松

と寢覚という、同時代のほぼ同じ長さの作り物語で、約半数が共通語彙であるとすれば、作品量が二倍に増加しても異なり語彙数は一・五倍にとどまるわけであるが、厳密に言うと、増加が〇・五であったのではない。共通異なり語彙二八五七語は、浜松（四九三五語）から見て〇・五八、寢覚（五五六二語）からでは〇・五一になるが、僅か二作品一例のみの共通率を以て他を推し量ろうというのであるから、〇・五と控え目な割切れた数にしておく方がむしろ正確と考えたのである。この共通率なるものは、両作品の長さがほぼ同一の場合が良いが、長さの異なる作品間では、共通語数は変らないから、作品の長い、従って異なり語彙数の多い側から見れば割合が低く、逆に短い作品からは高くなる結果になるのは、浜松、寢覚の例でさえあらわれている通りである。また同一量の作品間であっても、両者の量が小さい（短い）作品になる程、異なり語彙中の基本語彙の占める割合は、その頻度数の-highが故に増加するから、必然的に共通率が高まる結果になるであろう。それら比較する前提となるべき諸条件をにらみ合せ、二作品間の語彙の共通性を客観視しうる数値として、宮島氏註註はまた、語彙の類似度を算定している。氏は、単に異なり語彙の共通、非共通のみでなく、重なり合いの拠ってくる各語彙の使用率にも着目し、A・B 両作品間におけるある単語の使用率を $P_i(A)$ 、 $P_i(B)$ とすれば、両作品間の類似度 C_{AB} は、

$$C_{AB} = 1 - \frac{1}{2} \sum_i (|P_i(A) - P_i(B)|)$$

で求められるとし、実際に十三作品間の類似度を算出されている。それによると、古今集と後撰集とのように、〇・七三五と極めて高い数値を見ることがあれば、万葉と紫式部日記とのように、〇・二九という低い例もあって、特に万葉集ほどの作品とも低い類似度を持つ（従って独特の語彙を持つ）など、その振幅は大きい。しかし時代と形態をほぼ等しくする作品間において、物語では、源氏^ノ竹取^〇・四四五、源氏^ノ伊勢^〇・四四六、伊勢^ノ竹取^〇・四四七、とゆれが殆んどなく、仮名日記でも、蜻蛉^ノ紫^〇・四八三、蜻蛉^ノ更級^〇・五五〇、紫^ノ更級^〇・四六三、となつて、蜻

鈴、更級兩日記間の緊密度がやや高いほかは、それ程の振幅が見られない。宮島氏のいわゆる類似度は、語彙の共通率と必ずしも一致するものではなく、或る程度の作品量があれば、殆んど共通する筈の付属語が除外されているので、そのまま共通率として転用するのは問題であろうが、以上の平均値よりやや高い数値を仮説として想定するならば、やはり〇・五という増加率は、許容されるのではないかとも思う。唐物語固有の論点から逸脱して、いささか言いわけの堂々めぐりめいてしまったが、作品量と異なり語彙数との函数関係については、水谷静夫氏に幾つかの理論的な試みがある。ただ、宮島氏の統計表によっても、異なり語数で、古今（一九九四）、更級（一九五〇）、後撰（一九二三）の順で接近しているのに、延べ語数では、後撰（二一九五五）、古今（二〇〇一五）、更級（七二四三）の順に、それも大幅な相異を見せているのでもわかる通り、一筋縄ではいきそうにない。やはり作品個々の事情、内容に拠る所が大きく、いろいろな面で、所詮振幅なしには律せないのであるか。いずれにせよ、唐物語の異なり語彙数も、その数値のみで直ちに多寡の結論は出しえないと言えるであろう。

三

唐物語A類本の異なり語彙数が、この索引によって数えると一八六六語であることは前述したが、延べ語彙数は二一八二語であった。延べ語彙数の品詞別内訳は求めなかったが、自立語と付属語との比率は次の通りである。

自立語 六六九七語（五五・〇％）

付属語 五四八五語（四五・〇％）

次に、索引は、凡例に示したように、A類本を底本に、B・C兩類との校異索引を伴なっているので、異なり語彙数をB類に求めると、一八六一語、C類では一八八一語で若干の異同が見られる。これを品詞別に一覧すると、次のようになる。

| 品 詞 | A 類 本 | B 類 本 | C 類 本 | 三類共通 |
|---------|-------------|-------------|-------------|------|
| 動 詞 | 六四八 (三三・七%) | 六五一 (三三・〇%) | 六五九 (三三・〇%) | 七二三 |
| 形 容 詞 | 一四五 (七・八%) | 一四六 (七・九%) | 一四三 (七・六%) | 一五二 |
| 形 容 動 詞 | 四八 (二・六%) | 四五 (二・四%) | 四六 (二・五%) | 四九 |
| 名 詞 | 八六二 (四二・二%) | 八五五 (四二・〇%) | 八七〇 (四二・三%) | 九〇八 |
| 副 詞 | 七六 (四・二%) | 七五 (四・〇%) | 七六 (四・〇%) | 七八 |
| 連 体 詞 | 四 (〇・二%) | 四 (〇・二%) | 四 (〇・二%) | 四 |
| 接 続 詞 | 一 (〇・〇五%) | 一 (〇・〇五%) | 一 (〇・〇五%) | 一 |
| 間 投 詞 | 一 (〇・〇五%) | 一 (〇・〇五%) | 一 (〇・〇五%) | 一 |
| 助 動 詞 | 二九 (一・六%) | 三一 (一・七%) | 二九 (一・五%) | 三二 |
| 助 詞 | 四六 (二・五%) | 四六 (二・五%) | 四六 (二・五%) | 四六 |
| 接 尾 語 | 六 (〇・三%) | 六 (〇・三%) | 六 (〇・三%) | 六 |
| 合 計 | 一八六六 | 一八六一 | 一八八一 | 一九九〇 |

異なり語彙の品詞別百分比の上で屢々用いられる大野晋氏のグラフ^{註13}に以上の結果をあてはめるためには、形容詞の
 カリ活用を一語に扱い直さねばならない。いまA類本に限定して考えると、カリ活用を含む形容詞(カリ活用のみの
 形容詞は除く)が二四語なので、形容詞の異なり語彙数が一六九語に増加すると同時に総数も一八九〇語になり、割
 合は八・九%に当る。また、名詞、動詞、形容動詞の絶対数は変わらないものの、それぞれの百分比も、四六・六%、
 三四・三%、二・五%に変化し、以下の品詞の割合も若干低下するがここでは問わない。名詞の四六・六%というの

は、大野氏のグラフを引用して示すまでもなく、氏の分類通り、唐物語がやはり物語グループの特徴をあらわすことを意味する。即ち、グラフでの名詞の位置は、最右端の源氏物語（四四・三%）よりは少し左、次の竹取物語（四七・四%）よりは右に落着く。ただ、大野氏の試みには、まだ索引類の刊行されていなかった軍記物グループとも呼ぶ作品が収められていない。そこで近時刊行された平家物語総索引（金田一春彦氏他編）に添えられた統計表に依ると、体言が名詞、代名詞、人名、地名、固有名詞の五つに分けられており、これを「名詞」と総称すると、その異なり語彙数は実に九三七五に達し、総異語数が一一四一五語であるから、百分比は八二・一%にも及ぶ。尤も、ここに示された名詞の中には、形容動詞の語幹も含まれているが、名詞の割合が多い場合、形容動詞のそれが漸減するというのがこのグラフの傾向であるから、幾ら多くを予想しても二%以下であろう。従って、この形容動詞を独立させ、一方、形容詞のかり活用を別立てにする増加分を見越しても、平家物語における名詞の百分比は、八〇%をそう下らないわけである。グラフの最左端、名詞の割合が最も大きいのが万葉集の六六・五%なので、平家物語はそれを越えること遥かに、その領域を拡大してしまうのである。俄かに検討の用意もないが、中世という意味では方丈記（五六・五%）、徒然草（五八・六%）ともそれ程多くはないので、やはり形態に由来する内容の問題であろう。平家は、人名、地名、固有名詞を合わせたの二四八〇語だけで二一・七二%に達し、また普通名詞を通覧すると、漢語（字音語）が著しく多く見えるのとも関連があるであろう。いずれにせよ、今後、他の軍記物語の索引も刊行される由なので、それらを俟っての新たな検討が必要であろう。

唐物語は、物語とは言え、内容から見ればむしろ説話と呼んでも良いから、固有名詞の頻出が予想される。しかし実際を見ると、人名が七七語、地名（建造物など含む）が三二語、その他書名、年号などの固有名詞が五語で、合わせても一一四語、全体の六・〇%に過ぎないから、平家物語とは比較にならない。ただ注意すべきは、唐物語が中国説話の翻訳物語である性格上、これら固有名詞の内、えびす、たなばた、ひこぼし、まぼろしの四語を除いたすべてが漢

語である点であろう。そしてこれが、固有名詞に限らず、全体的傾向として見られるのではないかという予想もされる。宮島氏はさきの統計表で、古典十四作品の自立語異なり語彙を、和語、漢語、混種語の三つに種類分けする試みをされているが、その方法で唐物語を見ると、勿論以上の固有名詞群を含めて

和語——一六〇五語（八九・九%）

漢語——一六〇語（九・〇%）

混種語——二〇語（一・一%）

合計 一七八五語

となる。以上は、十四作品の平均値、漢語一三・六%、混種語四・〇%より低く、漢語のみを見ても、徒然草（二八・一%）、大鏡（二七・六%）、方丈記（二〇・一%）の半分に満たない。結局、源氏物語の八・八%に最も近いが、その混種語四・〇%を含めると、唐物語がむしろ低くなり、更級日記（七・五%）、伊勢物語（六・七%）、蜻蛉日記（六・七%）よりは高いという程度である。そして漢語に分類される一六〇語のすべてが固有名詞を含む名詞であり、混種語も、名詞が九語と半数に近く、結局、名詞以外の語とは、愛しいと既ぶ、相具す、相念ず、御覽じ付く、御覽じ尽す、御覽ず、奏す（以上動詞）、愛々し、様さま様し（形容詞）、優いなり（形容動詞）、斯か様（副詞）のみである。これは唐物語の文章を一読するのみで理解しうることでもあるが、決して漢語の多い作品ではないことを示している。

伝本系統別の漢語の分布も、この索引による限りは殆んど異同がない。しかし、B類本が表記の上で漢字を多く用いているのは、校本に対校した本文によっても示したところである。たとえば、第二十四話の冒頭

昔上陽人上陽宮にとち籠られて多の年月を送けり秋夜春日明晩は風の音虫の声より外に又音信物なきに嵐にたく
ふ紅葉の錦百轉鶯の声も吾ためはいとなさけなき心地す

を見よう。年月、秋夜、春日がここで音読を決してされないとはい、実は言い切れない。しかし、明晩は「あけくれ」

と読むほかはあるまい。音信物、百轉驚も「おとづるもの」「もさへづりのうぐひす」であろうし、「あらしにたぐふコウエフのキン」とも読めないという視点から立戻って読めば、「多の年月」は「おほくのとしつき」であり、「秋夜春日」は、「秋の夜春の目」と「の」を補ってまでも訓読した方が穏当だと考えるのである。そこで、以上のような例のすべてではないまでも、一部を音読と考える立場に立って語彙を見直すなら、B類本については若干の漢語の増加を見るではあろう。ただ、B類本のこうした表記が、漢文を翻訳した際のいわばしかけた状態によって生じていると考えるよりは、書誌的な面からも、本文上からも、或いは出典注記があるという点からも、後人が典拠である漢文と再び出会わせたことによって生じたと考えている私の立場からすれば、あまり意味がないと思うのである。系統別の語彙の変化については後節で述べるとして、品詞別百分比に関しても、各類間における名詞の割合が相互に最大〇・三%の振幅を見せるにとどまるのであるから、また変化が全くないと言える。

四

唐物語の延べ語彙数はA類本で二二二語であったから、或る語がこの物語で一語のみの用例を持っていれば、それだけで使用度数は〇・一パーミル(%)に近くなってしまう。一般に基本語彙の基準使用率に用いられるこの〇・一%を以てすれば、唐物語では、殆んど語を撰ぶことができなくなってしまいうわけであるから、この物語で、どういふ語がどれ程多く使用されているかを考える上では、せいぜい五例(〇・四一%)以上の用語を対象にした方が、範囲が狭くなると考えられる。使用度数が多くなる程、対象語が激減していくことは従来も屢々指摘されるところであり、唐物語についても次のようになる。自立語、付属語を含めた結果を示そう。

一〇〇例以上

一四語(〇・七五%)

九九以下五〇例以上

二二語(一・一八%)

| | | |
|---------------------------|-----|---------|
| 明し暮す | 7 | C-1 |
| 秋 | 22 | |
| 浅し | 12 | B-1 C-1 |
| あさまし | 11 | B+1 |
| あした | 6 | |
| あはれなり | 9 | B+1 C+1 |
| 相具す | 6 | |
| あひ見る | 9 | |
| あふ(合・逢) | 17 | B-1 |
| あまた | 8 | B-1 |
| 余り | 5 | |
| 雨 | 9 | |
| あやし | 8 | |
| あり | 123 | C-1 |
| 有様 <small>あるさま</small> | 18 | C+1 |
| 主 | 19 | C-3 |
| いかで | 8 | |
| いかなり | 26 | |
| 憤り | 5 | C+1 |
| 生 <small>なま</small> く(四段) | 7 | C+1 |
| 出 <small>で</small> す | 6 | |
| 至る | 5 | C+1 |
| 出 <small>で</small> づ | 11 | |
| いと(甚) | 23 | C+1 |
| いとど | 7 | C+1 |
| 犬 <small>いぬ</small> | 9 | |
| 命 <small>いのち</small> | 13 | C+1 |
| 言はく | 20 | |
| 言ふ | 83 | B+6 C+1 |
| 今 | 18 | |
| いみじ | 9 | B+1 |
| いやし | 6 | |
| 入 <small>い</small> る(四段) | 9 | B+3 |
| 色 | 14 | B-1 C-1 |
| 憂し | 5 | B+1 C+1 |
| 失ふ | 7 | C-1 |
| うち(内・中) | 35 | |
| 美し | 5 | C+1 |
| うへ(帝) | 6 | C-1 |
| うへ(上・表) | 17 | C-1 |
| 生まる | 9 | B+1 |
| 恨み | 7 | C-1 |
| 嬉 <small>うれ</small> し | 10 | |
| 愁 <small>うれ</small> | 11 | B-2 C-1 |

げてみる。

そこで、五例以上は三四五語(一八・五%)になるが、これがB類、C類となると、幾分の変化が生じる。それらを別々に示すのでは煩雑になるので、A類本で五例以上の用語で、他類の増減の振幅(活用語では、一語の中で、ある活用形が増加し、逆に別の活用形が減少することがある)は問わないで、結果としての増減を、それぞれに示す一覧表を掲

| | |
|-----------|--------------|
| 四九以下三〇例以上 | 二四語(一・二九%) |
| 二九以下二〇例以上 | 二七語(一・四五%) |
| 一九以下一〇例以上 | 八二語(四・三九%) |
| 九以下 | 一七六語(九・三八%) |
| 五例以上 | 一五二一語(八一・五%) |
| 四例以下 | 一八六六語 |
| 合計 | |

| | | |
|-----------------------|-----|---------|
| き | 66 | C+1 |
| 聞く | 36 | |
| 聞えさす (動詞) | 18 | |
| 聞ゆ (動詞) | 25 | B-2 C-4 |
| 后 <small>きさき</small> | 13 | B+1 |
| 君 | 16 | C+3 |
| 具す | 5 | |
| 国 | 15 | C+1 |
| 限なし | 5 | |
| 雲 | 7 | |
| 車 | 6 | |
| 紅 <small>くれない</small> | 5 | C+2 |
| 気色 <small>けしき</small> | 17 | C-1 |
| けむ | 44 | B-1 |
| けり | 371 | B-7 C+6 |
| 子 | 10 | B-1 C+1 |
| 黄金 <small>こがね</small> | 7 | |
| 心地 | 14 | |
| 心 | 75 | B-1 C+1 |
| 心憂し | 5 | B+1 |
| 志 | 7 | |
| こそ | 19 | B+1 C+4 |
| 事 | 60 | B-3 C+3 |
| 如し | 12 | B-1 C+1 |
| ことわり | 7 | |
| 此の | 147 | B+1 C+3 |
| これ | 51 | B-1 |
| 殺す | 5 | C-1 |
| 声 | 14 | B-2 C-1 |
| さす (助動詞) | 14 | |
| さながら | 9 | |
| 候ふ (動詞) | 9 | |
| さへ | 10 | B-1 |
| 様 <small>さま</small> | 15 | C-2 |
| さまざま | 7 | C-1 |
| さまざまなり | 5 | |
| 更なり | 6 | |
| さり (然) | 7 | C-1 B+2 |
| 三千人 | 5 | |
| じ (助動詞) | 13 | B-1 |
| 四皓 | 5 | |
| 然 <small>しか</small> り | 11 | B+2 C+2 |
| 従ふ | 10 | |

| | | |
|-------------------------|----|---------|
| 纒 <small>お</small> | 5 | |
| 置く | 5 | B+1 |
| 送る | 7 | |
| 怠る | 6 | |
| 押さふ | 7 | C-1 |
| 音 <small>ね</small> | 10 | B+1 C-1 |
| 同じ | 7 | |
| おのおの | 7 | |
| おはします | 5 | B-2 |
| おはす | 9 | B-1 C+1 |
| おぼす | 44 | C+2 |
| おぼゆ | 54 | B-2 C-2 |
| 思ひ | 6 | C-1 |
| 思ひ知る | 5 | B+1 |
| 思ひのほか | 5 | |
| 思ふ | 60 | B+4 C+1 |
| 親 | 7 | C+1 |
| 愚かなり | 5 | B-1 |
| おん傍 <small>かたはら</small> | 7 | |
| おん袖 | 6 | |
| おん供 | 6 | |
| おん身 | 5 | |
| か | 34 | C-3 |
| が | 29 | B-1 C+3 |
| 鏡 | 6 | |
| かかり (斯) | 30 | B-2 |
| 限り | 5 | |
| 限りなし | 25 | B-2 C-2 |
| 掛く | 9 | |
| かく (斯) | 10 | B-1 C+1 |
| かくて (斯) | 19 | C+2 |
| 影 | 8 | |
| 賢し | 7 | B-1 |
| 数 | 6 | |
| 風 | 11 | C-1 |
| 敵 <small>かたき</small> | 11 | |
| がたし | 23 | B-1 |
| 容貌 <small>かたち</small> | 17 | B+1 C-2 |
| かな (哉) | 6 | B+1 |
| 悲し | 11 | |
| 叶ふ | 5 | C-1 |
| 必ず | 8 | |
| 変る | 9 | |
| かへる (返・帰) | 15 | B+1 |

| | | |
|---------|-----|---------|
| 父 | 6 | C-1 |
| 父母 | 8 | |
| 帳 | 5 | |
| つ | 33 | B-2 C+2 |
| 使はれ人 | 8 | |
| つき(月輪) | 21 | B+3 |
| 月日 | 8 | |
| 付く(下二段) | 16 | C+1 |
| つつ | 50 | B-2 C-1 |
| 遂に | 13 | B-2 C+1 |
| 罪 | 11 | |
| 露 | 10 | B-1 C-1 |
| て | 488 | B+4 C+4 |
| で | 10 | B-2 C-1 |
| 程嬰 | 9 | |
| 趙朔 | 5 | |
| と | 266 | B+3 C-1 |
| ど | 42 | B-6 C-1 |
| 東宮 | 11 | B+1 C+1 |
| 時 | 27 | |
| 所 | 17 | C+2 |
| とし(暦年) | 8 | B-1 C-1 |
| 年頃 | 10 | |
| 年月 | 12 | C+1 |
| とて | 6 | B-2 C-1 |
| 問ふ | 7 | B-1 C+1 |
| とも | 21 | B-1 C+1 |
| ども | 41 | B+8 C+4 |
| ともしび | 6 | |
| 鳥 | 7 | C+2 |
| 取る | 18 | B+1 C+1 |
| 中 | 21 | B-1 C-1 |
| 流す | 7 | |
| ながら | 20 | B-1 C+1 |
| なさけ | 13 | C-1 |
| なさけなし | 8 | |
| 無し | 88 | B-1 C+1 |
| なす(為・成) | 6 | B+3 C-1 |
| 夏 | 5 | |
| など | 31 | B-3 C+1 |
| 何 | 7 | |
| 何事 | 5 | |
| なほ | 19 | B+1 C+4 |

| | | |
|---------|-----|---------|
| 沈む(四段) | 7 | B-1 |
| して | 16 | B+1 C+1 |
| 死ぬ | 8 | |
| しばし | 6 | B-1 |
| 強ひて | 5 | |
| しも(助詞) | 6 | |
| 杵臼 | 8 | |
| 知る(四段) | 34 | C-2 |
| 親王 | 6 | |
| す(為) | 45 | B+1 |
| す | 61 | B+3 C+2 |
| ず | 222 | B+6 C+2 |
| 姿 | 9 | C+1 |
| 過ぐ | 7 | B+1 |
| 過す | 5 | B-2 C+1 |
| すぐる(秀) | 7 | B-1 |
| 捨つ | 6 | |
| すべて | 6 | |
| 澄ます | 6 | C-1 |
| 住む | 6 | |
| ぞ | 39 | |
| 袖 | 10 | |
| 其の | 57 | B+1 C+4 |
| 背く(四段) | 7 | B+1 |
| 空 | 11 | B-1 |
| それ | 6 | |
| 高し | 8 | |
| 互ひに | 5 | B-1 C+1 |
| 違ふ | 8 | |
| たぐひなし | 21 | B-2 C+1 |
| ただ | 20 | B+1 C+2 |
| 立ち帰る | 5 | |
| 忽ちに | 11 | |
| 奉る(助動詞) | 28 | B+1 C-1 |
| だに | 10 | C+1 |
| たび(度) | 7 | B-1 |
| 玉 | 15 | B-1 |
| 給ふ(四段) | 59 | B+2 C+4 |
| 絶ゆ | 12 | B+1 C-1 |
| たり | 91 | B-1 C-1 |
| 籠 | 16 | C-1 |
| 契り | 16 | |
| 契る | 5 | C+1 |

| | | |
|------------------------|-----|---------|
| 古し | 5 | B+1 |
| へ | 12 | |
| べし | 81 | B+1 |
| 本意 <small>ほんい</small> | 6 | |
| ほか | 13 | |
| 程 | 42 | B+1 C+5 |
| 申す(動詞) | 31 | B+1 C+2 |
| 任す <small>まか</small> | 7 | |
| まことなり | 8 | |
| まさる(増・勝) | 12 | |
| まし | 5 | |
| また(又・復) | 42 | B+3 C+3 |
| 間近し | 6 | |
| 待つ | 7 | |
| 先づ | 8 | B-1 |
| 貧し | 5 | |
| まつりごと | 7 | |
| まで | 23 | B-2 |
| 幻(固有名詞) | 5 | B+1 |
| まま(儘) | 8 | |
| 参る(動詞) | 9 | |
| 身 | 25 | |
| みかど | 52 | C+1 |
| 御心 <small>みこころ</small> | 29 | B-3 C+2 |
| 御志 <small>みこころ</small> | 7 | B+1 C+1 |
| 乱る(下二段) | 5 | |
| 道 | 15 | B-1 |
| みづから | 9 | B-1 C-1 |
| 三年 <small>みとせ</small> | 6 | |
| 皆 | 8 | B-2 C+1 |
| みや(宮殿) | 6 | |
| 都 | 5 | B+1 |
| 見ゆ <small>みゆ</small> | 25 | C+1 |
| 行幸す | 5 | |
| 見る | 34 | B-1 C-1 |
| む | 75 | B-6 C+4 |
| 昔 | 55 | B-1 |
| 結ぶ | 5 | |
| 娘 <small>むすめ</small> | 8 | B-1 |
| 空し <small>むな</small> | 8 | |
| 目 | 7 | |
| めづ | 6 | C-1 |
| めでたし | 5 | |
| も | 275 | B+3 C-1 |

| | | |
|------------------------|-----|---------|
| 涙 | 34 | B-2 C-1 |
| なむ(係助詞) | 25 | B+1 C-2 |
| ならびなし | 7 | B+3 |
| なり(断定) | 75 | B+1 |
| 成る | 64 | B-1 C+3 |
| に | 808 | C-10 |
| 錦 <small>にしき</small> | 6 | C+1 |
| にて | 24 | B-1 |
| 女房 | 5 | |
| 似る | 7 | |
| ぬ | 40 | B+1 C-6 |
| 願ふ | 7 | B+1 |
| ねんごろなり | 9 | C+1 |
| の | 626 | B-5 C+9 |
| 宣ふ <small>のたま</small> | 13 | B-1 |
| 後 | 35 | B+2 |
| 野辺 | 5 | C-1 |
| のみ | 27 | B+1 C+2 |
| は | 161 | B-1 C+9 |
| ば(未然接続) | 25 | |
| ば(已然接続) | 118 | B-1 C-1 |
| 方士 | 5 | B-1 |
| はかなし | 26 | C+1 |
| ばかり | 22 | B+1 C-1 |
| 花 | 11 | B+1 |
| 侍り(動詞) | 16 | B+3 C+2 |
| 侍り(助動詞) | 6 | |
| 早し | 5 | |
| 春 | 12 | |
| 遙かなり | 7 | |
| 光 | 8 | |
| 久し | 6 | B-1 |
| 人 | 148 | B-1 C+5 |
| 人知る(下二段) | 8 | B+1 |
| 一度 <small>ひとたび</small> | 5 | |
| 人人 | 9 | |
| ひとり(一人・独) | 15 | B-1 C-1 |
| 琵琶 | 5 | B-1 |
| ひまなし | 5 | |
| ふ(經) | 10 | |
| 深し | 39 | B-2 C+1 |
| 吹く | 5 | |
| 二人 | 12 | |
| 触る | 6 | C+1 |

| | | | |
|----------|-----|------|-----|
| 依る | 17 | B-1 | C+2 |
| よろづ | 14 | | |
| らむ | 6 | | C+1 |
| らる | 16 | B-1 | |
| り | 102 | B+6 | C-2 |
| 呂后 | 7 | | |
| る | 37 | B+3 | |
| 我が | 17 | B+1 | |
| 別る | 5 | B+2 | |
| 忘る (下二段) | 12 | B+1 | |
| 渡る | 6 | | |
| わりなし | 8 | | |
| 我 | 44 | | C+2 |
| 居る | 7 | B-2 | |
| を | 525 | B-11 | C+5 |
| 夫 | 12 | B-4 | C-5 |
| 教ふ | 5 | | |
| 舅 | 11 | B+4 | C+5 |
| をば | 16 | B+4 | |
| 女 | 22 | | |

| | | | |
|----------|----|-----|-----|
| もの (物・者) | 44 | B-1 | C+2 |
| もろともに | 10 | B+1 | C+1 |
| や (擬・反) | 76 | | C+4 |
| やう (様) | 5 | | |
| 楊貴妃 | 18 | B-1 | |
| 楊国忠 | 6 | | C+1 |
| やうやう | 8 | | |
| 山 | 11 | | |
| 病び | 8 | | |
| 床 | 6 | | C+1 |
| 行く | 10 | | |
| 夕べ | 9 | | C+1 |
| 故 | 5 | | C+2 |
| よ (世・代) | 57 | B-3 | |
| 夜 | 17 | B+1 | C-1 |
| 由 | 8 | B+1 | |
| 世の中 | 15 | B+1 | C+1 |
| 四方 | 5 | | |
| より | 55 | | C+1 |
| 夜 | 6 | | |

基本語彙に関する論考には幾つかあるが、いま右に掲げた表は、唐物語という一作品の中での使用率の高い語群を示したので、平安朝和文作品の中で索引のある十六作品を取り上げ、それぞれの語彙の取り上げ方の相異を補正した上で、その五作品以上に用例（使用率は問わない）のある自立語、三一〇八語を選び出した山本トシ氏の調査との関連が興味深い。即ち、唐物語の以上の三四五語中、自立語は二九一語であるが、この内山本氏の語彙表に見える語が二五七語（八八・三%）あり、唐物語に頻出する語彙の基調が王朝語にはかならないことを如実に示しているが、一方、そこに見えない三四語について若干検討してみたい。（山本氏の表に「秋」が欠けているが、この表をも用いた大野^{註15}氏の基本語彙表には十五作品にわたる語として含まれているので、当然この中に数えていない）

この三四語を通覧すると、四皓から呂后まで、八語の人名があるから、これは論外であろうし、纓、三千人、方士もこれに準じた唐物語ゆえの特殊語と考えられる。次に「おん^{おん}傍^{ばう}」以下、「御^ご」や「御^み」を冠する六語は山本表の対象外であるから、三四に含めない方が良かったし、「使はれ人」「世の中」がないのも、特に後者は分割されて処理されているからで、これもはずして良い。そして結局残るのが、次の一五語である。（カッコ内は用例数）

相具す(6) 憤り(5) 言はく(20) 失ふ(7) かたき(11) しかり(11) 親王(6) 互ひに(5) ともしび(6) 願ふ(7) 琵琶(5)
 貧し(5) 三年(6) 床(6) 夫(12)

右の内、「言はく」も、多くの索引で分割して処理されているからかと思われるが、唐物語に二〇例もあり、三例ながら「言はく」などとともに、訓読文の影響が考えられて注意される。しかし、他の十四語を宮島氏の語い表で見ると、山本氏が用いたのと作品は一致しないものの、失ふ（八作品に見える）、かたき（五）、しかり（八）、親王（二）、互ひに（三）、ともしび（四）、願ふ（五）、琵琶（七）、貧し（五）、三年（五）、床（二）のように、かなりの作品に見る語もあって、一見問題がないように思われる。

宮島表にも載らない語からまず考えると、「相具す」は「平家物語」には二二例も見えるのに、徒然草や方丈記に

も例を見ない。また宮島表には「憤り」もない。万葉に「憤る」という動詞が一例あるのみであるが、それは腹を立てる意味ではない。心中に不満がふすぶりが心が晴れないことを指すが、「いきどほる」にせよ、「いきどほり」という連用形による名詞形にせよ、平安期の和文には乏しい。ところが、築島裕氏の指摘によれば、「イキドホル」「イキドホリ」「イキドホロシ」の語は、平安の訓点語として多くの例があり、「立腹」の意の用例も幾つか掲げられている。

氏はこれに対応する和語は「ムツカル」であろうという。宮島表によれば、「むつかり」はないが、「むつかる」は五作品に見え、いずれも平安時代の和文で、特に源氏には一五例見える。しかし、「憤り」は平家には一三例もあり、「御憤り」も六例、「憤る」も五例ある。尤も「むつかる」も、徒然草、方丈記にはないが、平家には二例を見るのみである。

「夫」を「をうと」と読んだのには、校訂の上で問題がある。凡例でも述べた通り、底本に「夫」と表記されているが、「をうと」と読むことに統一したのであるが、一つには底本にそう振仮名が施されているのに引きずられたのである。実際「をとこ」と読んだ方が内容の上から、より適切であろうかと思われる場合もある。前表を見ても、

「をうと」は自立語の中では目立ってB・C類が減少し、「をとこ」が逆に増加している。ただ余りに適宜に読むのはなお憚られるので、統一して断わったのである。平家にも「をうと」はなく「をとつと」が僅か一例あるのみで、宮島表にもない語なのは不安であるが、「をうと」は和名抄にも見える訓なので、今はこのままにして、論点からは外したい。「親王」も「みこ」と読めないではないが、第十七話、第十八話に各一例ある「親王」はともかく、四例が集中する第十話では「時の親王にておはしける人にかきりなく思かしつかれて」とあるのと、三類主底本三本の全用例を通じて、例外なく表記が「親王」とあるのとなどで、「しんわう」を採った。「床」も「ゆか」「とこ」の読みが確定したい。

宮島表によって多くの作品中に見える語、たとえば八作品に見える「しかり」も、内容を考えると、万葉の二〇〇例を除いては、竹取の二例、以下は、徒然、方丈、大鏡、蜻蛉、土左、古今に各一例を見るのみで、一方、訓読語には

多くの用例を見る語であるから、唐物語に一一例もあるのは、平安和文調としては異例と言って良からう。平家物語に「しかり」が一一例も見えるのが、又併せて注意される。

以上を整理して述べれば、平安時代和文の基本語彙に唐物語の高頻度語彙を照合してみると、惣じて唐物語が前者を基調としていることが知られるが、形式的な処理によってそこからはみ出した語を更に検討すると、一部に訓点語として多用されている語を含むのと、それらが、平家物語に用例を多く見せることがあげられよう。さきの十五語で平家に見る十三語の用例数を改めて列記すれば、相具す21、憤り13、言はく12、失ふ65、かたき150、しかり111、親王24、互ひに27、ともしび6、願ふ30、琵琶21、三年14、床21である。使用率を問題にするまでもなく、以上の殆んどは平安の和文より高頻度に使用され、平家より長篇の源氏物語の用例が右を上回るのは「琵琶」が三八例あるのみで、他に用例のある七語は平家の半分以上、残りの五語では全く用例を見ないのである。源氏に用例を見ないので、「かたき」が平家に多いのなどは、内容上首肯しうとしても、唐物語に多いのも題材の問題として興味深い。また、前述した「しかり」の用例が平家に百以上もあるのについて、「互ひに」が二七例見られるのは、やはり訓点語に頻用される語であるだけに、その関連が考慮される。また先の一五語の内、一〇語が徒然草に見える語であるのも、漢文脈的表現の一端をのぞかせているのと併せて、時代の反映があるとも言える。唐物語が表現として平安朝歌物語を指向しながら、本質がみやびとは幾分隔ったまことであり、心澄ますであり、なさけであると嘗て指摘註17したように、成立年代の上でも、中国説話の翻訳であるという点でも、そこをつきつめていくと、こうした徴候が垣間見えると言えるであろう。なお平家に一つも用例のない「貧し」が、徒然に八例見えることのみを言い添えておこう。

五

唐物語における一定の使用率以上の語群の傾向を前節で考察したが、それぞれの語がいかなる頻度で用いられてい

| | | | | | | |
|---------------|----|-------------|--------------|----|-----------|----|
| いはく(言) | 二〇 | つく(付) 一上二段一 | ごとし(如) | 二二 | おと(音) | 一〇 |
| ただ | 二〇 | はべり(侍) 一動詞一 | たゆ(絶) | 二三 | かく(斯) | 一〇 |
| ながら | 二〇 | らる | としつき(年月) | 二三 | こ(子) | 一〇 |
| あるじ(主) | 一九 | をば | はる(春) | 二三 | さへ一動詞一 | 一〇 |
| かくて(斯) | 一九 | かへる(帰・返) | ふたり(二人) | 二三 | したがふ(從) | 一〇 |
| こそ | 一九 | くに(国) | へ | 二三 | そで(袖) | 一〇 |
| なほ | 一九 | さま(様) | まさる(増・勝) | 二三 | だに | 一〇 |
| ありさま(有様) | 一八 | たま(玉) | わする(忘) 一上二段一 | 二三 | つゆ一動詞一 | 一〇 |
| いま(今) | 一八 | ひとり(一人) | をうと(夫) | 二二 | で | 一〇 |
| きこえさす(聞) 一動詞一 | 一八 | みち(道) | あさまし(浅) | 二一 | としごろ(年頃) | 一〇 |
| とる(取) | 一八 | よのなか(世中) | いづ(出) | 二一 | ふ(経) | 一〇 |
| やうきひ(楊貴妃) | 一八 | いろ(色) | うれへ(愁) | 二一 | もろともに(諸共) | 一〇 |
| あふ(合・逢) | 一七 | こち(心地) | かせ(風) | 二一 | ゆく(行) | 一〇 |
| うへ(上・表) | 一七 | こゑ(声) | かたき(敵) | 二一 | | |
| かたち(容貌) | 一七 | さす一動詞一 | かなし(悲) | 二一 | | |
| けしき(気色) | 一七 | よろづ(万) | しかり(然) | 二一 | | |
| ところ(所) | 一七 | いのち(命) | そら(空) | 二一 | | |
| よ(夜) | 一七 | きさき(后) | たちまちに(忽) | 二一 | | |
| よる(依) | 一七 | じ一動詞一 | つみ(罪) | 二一 | | |
| わが(我) | 一七 | つひに(遂) | とうぐう(東宮) | 二一 | | |
| きみ(君) | 一六 | なさけ(情) | はな(花) | 二一 | | |
| して一動詞一 | 一六 | のたまふ(宣) | やま(山) | 二一 | | |
| たれ(誰) | 一六 | ほか(外) | をとこ(男) | 二一 | | |
| ちぎり(契) | 一六 | あさし(浅) | うれし(嬉) | 二〇 | | |

以上で一六九語になるが、この内、自立語一一七語、付属語（補助動詞、接尾語を含む）五二語になり、右によると、上位九語までは付属語になる。宮島氏の統計表はまた、十四作品の上位二〇語の表を示しているが、ここで唐物語自立語のみの二〇位までの順位のみを示せば、1人、2此の、3有り、4無し、5言ふ、6心、7なる、8思ふ、9事、10其の、11世、12昔、13覚ゆ、14みかど、15これ、16す、17思す、18もの、19われ、20ほど・また、となる。第一位に「人」があるのは、徒然、紫式部、古今の三作品もあり、他も、大鏡と万葉が八位とやや下っているのは、すべて五位以内であるのを見ても、普遍的と言えよう。ただ、二位の「此の」は、大鏡が二位で一致し、土左が五位、竹取が五位と高順位であるものの、四作品は一〇位以下で、更に七作品では二〇位内にも入っていない。しかし、三位の「あり」は六作品が第一位で他も六位以内、四位の「なし」も十四作品全部が上位二〇語に、そして五位の「いふ」も古今集が二〇位以内に見えないのみで、土佐、竹取では第一位であるという具合に、唐物語の自立語の上位二〇語も、別段の特殊語は含まれていないと言えるであろう。これは、各作品のそれぞれと共通語を検した結果でも、万葉と古今が非共通一一語ながら、他は一〇語以下、特に源氏、徒然では七語に相違が見られるに過ぎない点によっても理解しうる。一つのみ、一二位に「昔」が入っているのは、各話がその語によって始まるからで、同じ歌物語形式を持つ伊勢が、それを第五位に置いているのと類似するものであろう。いずれにせよ、竹取物語が「かぐや姫」を第六位に、「おきな」を第十三位に置いている意味での固有性は唐物語に見られまい。

付属語は、自主語と異なって、箇々の語の使用率が、作品の筋書きや内容に直接影響を受けないように思われ、逆に、形態や、作者の資質、即ち文態と深い係わりがあるのではないかと、思うのであるが、右の表を見たのみでは、俄かにそれを論述するわけにもいかない。付属語については、他の作品の使用率に関する整理された資料が、自立語程に出揃っていないからであるが、たとえば、唐物語の助動詞の最高使用率の語が「けり」であるのは、この作品が伊勢物語をはじめとする歌物語形式を模倣しているからであるとも見られよう。そして確かに、伊勢物語でもそのような

ではあるが、平家物語に於ても、助動詞頻度第一位は「けり」であるから、そうそう容易な意味づけはできそうになり。尤も、使用率からみれば、同じ第一位とはいえ。平家の四二二九例は、全延べ語彙の二・〇九%であるのに、唐物語では三・〇五%になるので、頻度が一段と高いとは指摘しうるが、それも更に比較し合う資料がないと、なんとも言えまい。また、平家の助詞の取り上げ方を私の方法に修正して、(但、「ば」のみ接続形によって区別しない平家の方法に従った)使用率とその順位を比較してみると、第八位までは、順序に異同があるのみで、同じ助詞群によって占められる。

(唐物語)

(平家物語)

| | | | | |
|---|---|-------------|---|---------------|
| 1 | に | 八〇八語 (六・六%) | の | 一〇四八一語 (五・三%) |
| 2 | の | 六二六語 (五・二%) | に | 七四三一語 (三・七%) |
| 3 | を | 五二五語 (四・三%) | て | 六六五三語 (三・七%) |
| 4 | て | 四八八語 (四・〇%) | を | 六四八八語 (三・六%) |
| 5 | も | 二七五語 (二・六%) | は | 五一四三語 (二・六%) |
| 6 | と | 二六六語 (二・六%) | と | 三九二三語 (二・九%) |
| 7 | は | 一六一語 (一・三%) | も | 三四六四語 (一・七%) |
| 8 | ば | 一四三語 (一・七%) | ば | 二六三三語 (一・三%) |

使用率の上から見れば、惣じて唐物語の方が若干高い中で、「の」は殆んど変わらず、特に増加したのが「に」(二・六倍)「を」(二・六倍)であり、半分になったのが「は」、幾分(〇・七)減少したのが「ば」となる。しかし折角右のような比較を試みても、それぞれの用法は何も考慮していないのであるし、使用率という普遍的数値であるにせよ、唐物語と平家物語とでは、作品量が一六倍以上(総延べ語彙数比)も隔る上に、形態、内容が異なり過ぎて、どう結論づけて良い

か判断に苦しんでしまふ。

ある作品の語彙の特徴を考察する際、その作品一つを以て論じえないこともないであろうが、他と比較することで行なうことも良いであろう。私も嘗て、源氏物語と浜松中納言物語の語彙の内、形容詞、形容動詞、副詞における各語の消長を以て、浜松中納言物語の文学史的性格の一端を窺おうとしたことがあった。そこで唐物語の語彙をもう少し考える上での方法として、ここに、松浦宮物語の語彙と比較する材料を少し提供しておきたい。松浦宮を採り上げる理由の第一が、総索引の刊行によるのはもとよりであるが、内容上の理由としては、一つにこれが舞台を中国にまで広げている物語であること、軍記物語の先蹤的内容を持つ場面があること、無名草子の作者が述べる通りに定家が少将時代の作とすれば、藤原成範が作者として定説化しつつある唐物語と成立年代の上で接近すること、そして作品量が余り相異しないことなどが挙げられる。

松浦宮は角川文庫本^{註20}によって見ると、総音節数は四八二〇〇、唐物語の約一・七倍である。右の音節数を、さきの私の数式に入れて異なり語彙数を計算してみると、二四六四語になる。ところが総索引の見出し語の内、参照語を除いて、実際に用例がある語は二七九九語である。この索引の方法は私の場合と若干異なる点があって、修正すると三〇語程減少しはするが、それでも計算値よりは一二%程も多い。前述した通り、私の数式は、惣じて作品量が小さいと、実測値の方が多くなるという欠陥があるが、唐物語がそれ程の開き(三・八%差)ではないのは、やはり唐物語の異なり語彙の数量が、作品量に対して乏しいこと、即ち、冒頭で予想した、この作品のボキャブラリーの貧困さか、或いは表現の類型性などの一端を示すものと言えるかもしれない。しかし、この問題を再びむし返すのは控えて、松浦宮物語における各語の使用率を唐物語と比較してみよう。

松浦宮の総延べ語彙数を集計するのは怠ってしまったが、唐物語の作品量(総音節数比)にほぼ比例すると考えれば、約二〇九〇〇語程になるであろう。松浦宮から、用例五以上の語を拾い出し(以下単語の認定は私の索引の方法に修正

して用いる)てみると五五三語、全異なり語彙数の二〇・〇%になる。唐物語の三四五語より多いのは、作品量が大
きいこともあるが、同じ五例と言っても、そのために使用率も低く(〇・二四%)なってしまうからである。

一〇〇以上用例のある語が二七語(〇・六%)、九九以下五〇例以上が二二語(〇・七%)、三〇例以上が三四語(〇・三%)、二
〇例以上が五一語(〇・六%)、一〇例以上が一四二語(〇・三%)五例以上が二七七語(〇・〇%)の合計五五三語で、従っ
て四例以下の語は二二一五語(〇・〇%)になる。使用率が低くても、四例以下語の割合が唐物語(〇・五%)とそう異な
らないのは、唐物語の方が、同じ語にとかく偏って用いる傾向があるからと言えるかも知れない。

さきに唐物語の語彙を頻度順に用例一〇以上の二六九語を一覧させたが、松浦宮の頻度順の一六九番目の語は「も
と(元・旧・故)」で用例一六語である。そこで、同じ形式により松浦宮の頻度順一六九語を次に示してみる。

| | | | | | | | |
|---------------|------|--------|-----|----------|----|---------|----|
| に | 一〇六三 | なし(無) | 一八二 | ぞ | 八六 | かた(方) | 五五 |
| の | 一〇四七 | べし | 一七四 | けり | 八四 | なる(為・成) | 五五 |
| を | 八一七 | ひと(人) | 一七二 | おもふ(思) | 八三 | また(又・復) | 五五 |
| て | 六六八 | き | 一六五 | や―疑問・反語― | 八二 | いと | 五三 |
| も | 五五五 | こと(事) | 一五八 | くに(國) | 八一 | ところ(所) | 五三 |
| ず | 四四五 | なり―断定― | 一四六 | のみ | 八一 | もの(物・者) | 五一 |
| と | 四〇六 | り | 一四一 | つ | 七七 | か | 五〇 |
| は | 三六九 | たり | 一三五 | より | 七六 | その(其) | 四九 |
| ば―已然形接続― | 二四七 | ところ(心) | 一二〇 | ただ | 六七 | つき(月輪) | 四九 |
| たまふ(給)―四段―二三四 | | この(此) | 一〇七 | しる(知) | 六六 | とき(時) | 四八 |
| む | 二二八 | す(為) | 一〇七 | ほど(程) | 六三 | わが(我) | 四七 |
| ぬ | 二二〇 | み(身) | 一〇四 | だに | 六〇 | いくさ(軍) | 四六 |
| あり(有) | 一九〇 | る | 一〇四 | みち(道) | 五六 | ばかり | 四六 |
| ど | 一八三 | みる(見) | 八九 | いふ | 五五 | らる | 四六 |

| | | | | | | | |
|---------------|----|------------|----|-------------|----|--------------|----|
| す | 四三 | やま(山) | 三三 | ちぎり(契) | 二六 | あと(後・跡) | 二〇 |
| いま(今) | 四二 | さらなり(更) | 三二 | つつ | 二六 | あやし(怪) | 二〇 |
| など | 四二 | うち(内・中) | 三一 | ひとびと(人人) | 二六 | おろかなり(愚) | 二〇 |
| にて | 四二 | して | 三一 | ゆゑ(故・由) | 二六 | したがふ(従)―四段― | 二〇 |
| さま(様) | 四一 | けしき(気色) | 三〇 | かならず(必) | 二四 | そふ(添)―四段― | 二〇 |
| ば―未然形接続― | 四一 | こち(心地) | 二九 | くも(雲) | 二四 | て(手) | 二〇 |
| が | 四〇 | し―助詞― | 二九 | これ(是) | 二四 | にほひ(匂) | 二〇 |
| なほ | 四〇 | つはもの(兵) | 二九 | ひとり(独) | 二四 | いろ(色) | 一九 |
| ふかし(深) | 四〇 | ながら | 二九 | みだる(乱)―下二段― | 二四 | つく(付・着)―下二段― | 一九 |
| まで | 四〇 | よ(夜) | 二九 | れい(例) | 二四 | とどむ(止・留) | 一九 |
| みゆ(見) | 三九 | よる(由・因) | 二九 | きさき(后) | 二三 | はかりごと(謀) | 一九 |
| よ(世・代) | 三八 | いとど | 二八 | さり(然) | 二三 | はな(花) | 一九 |
| こと(琴) | 三七 | がたし | 二八 | つきひ(月日) | 二三 | まうす(申) | 一九 |
| いみじ | 三六 | かへる(帰・返) | 二八 | ふみ(文) | 二三 | らむ | 一九 |
| そら(空) | 三六 | むかふ(向) | 二八 | まじ | 二三 | わかれ(別) | 一九 |
| いづ | 三五 | われ(我) | 二八 | まゐる(参) | 二三 | あはれなり(哀) | 一八 |
| のたまふ(宣) | 三五 | いる(入)―四段― | 二七 | よし(由・因) | 二三 | うへ(上) | 一八 |
| みかど(帝) | 三五 | かぎり(限) | 二七 | かの(彼) | 二三 | おほし(多) | 一八 |
| こそ | 三四 | きく(聞) | 二七 | ちから(力) | 二三 | けはひ(氣配) | 一八 |
| こそ(声) | 三四 | ことなり(異・殊) | 二七 | きみ(君) | 二二 | たのむ(頼)―四段― | 一八 |
| たてまつる(奉)―助動詞― | 三四 | はるかなり(遥) | 二七 | こちす(心地為) | 二二 | とほし(遠) | 一八 |
| いのち(命) | 三三 | まま(儘) | 二七 | なむ―係助詞― | 二二 | まして | 一八 |
| なみだ(涙) | 三三 | かなし(悲) | 二六 | ね(音) | 二二 | みや(宮) | 一八 |
| | 三三 | きこゆ(聞)―動詞― | 二六 | ゆめ(夢) | 二二 | わする(忘) | 一八 |

| | | | | | | | |
|--------|----|------------|----|-----------|----|-----------|----|
| いかで | 一七 | つくす(尽) | 一七 | おなじ(同) | 一六 | なか(中・仲) | 一六 |
| おぼす(思) | 一七 | とも—助詞— | 一七 | ごとし | 一六 | なに(何) | 一六 |
| おぼゆ(覚) | 一七 | まつりごと(政) | 一七 | さぶらふ(候・侍) | 一六 | もと(元・旧・故) | 一六 |
| かせ(風) | 一七 | みこ(公主・御子等) | 一七 | さへ | 一六 | | |
| けふ(今日) | 一七 | あはれ(哀—名詞—) | 一六 | とふ(問・訪) | 一六 | | |

一七〇番目は「あふ(逢・念)」で用例一五語になるから、以上は、松浦宮で一六語以上用例を見る語群でもある。唐物語の一〇例語の使用率が〇・八二%であるに對し、これは〇・七七%になるから、使用率をほぼ同一にするなら、一七例(〇・八一%)以上の一六〇語が対応することになりはするが、松浦宮の総延べ語彙数が推計によるものであるから、同数を掲げたのである。

助詞を見ると、使用率は別にして、第八位までの順序が、「に・の・を・て・も・と・は・ば(已)」と、唐物語と松浦宮とで全く一致している。尤も、松浦宮索引の「に」の項には九四四語が掲載されているので、そのままでは第二位になるが、唐物語の方法に修正して、助動詞「なり」の連用形「に」をこちらに繰り入れたし、逆に松浦宮の「ば」に区別がないのを、未然形接続の「ば」を別立てにしたなどの操作が加わったのは勿論である。ただ、順位そのものにとれ程の意味があるかは疑問で、平家物語との比較の際にも見たように、一定の助詞群が高頻度を保っていることを理解しうるにとどまるのではある。そして、作品における傾向の一端を語彙によって考える上では、順位はその手がかりであり、それぞれの語の使用率の変化を土台にすべきである。とは言え、用例数が余りに少ない場合の使用率というのも、僅か一語の出入りにより使用率が大きく変化するわけであるから、判断の材料とするには問題が残りがちである。そこで唐物語における助詞のみの第二〇位までに見える語の一つ一つについて、松浦宮と、そして参考までに平家物語(総延べ語彙数比から作品量を唐物語の一六・二倍と試算)と対比して、それぞれの使用率を一とした時の、唐物語における使用率の増減を一覧させてみたい。

対平家で、二つの「ば」が欠けているのは、平家の索引で区別されていないそれを、俄かに用例に当るのができなかったため、一つの「ば」と考えれば、〇・八八になり、係助詞の「なむ」は平家に用例が一つもないからである。右の表を見て先ず思うのは、かなりの助詞の使用率が、異なる作品間でそう大きな相異を見せていないことであろう。一・五倍の増、一・五分の一（〇・六七）の減程度のゆれをほぼ同一使用率圏とするなら、対松浦宮では二〇語中一四語が、対平家では一九語中八語が圏内に入るのである。更に、二倍以上か半分以下を著しい相異と考えれば、対松浦宮では僅か四語、対平家でも八語にとどまってしまう。

松浦宮に比較して、唐物語が著しく増加している助詞の筆頭は一一倍半の「ども」であり、ついで「つつ」と「なむ」がある。逆に減少したのに「ど」があげられ、半分には達しないが、それに近く減少した語に「のみ」が指摘しうる。平家に比し、三二倍強という文字通り激増している助詞に「ど」があり、次の「つつ」も八倍半と多くて、「のみ」「など」「や」がそれに続く。係助詞の「なむ」に至っては、平家がゼロであるから、見方によれば「ど」の上に位置するかも知れない。三分の一近くに減少しているのは「が」「ぞ」で、「は」は半分と言って良い。一つ一つ取り上げる用意はないが、「ど」と「ども」の関係はシーソーのようである。唐物語では、「ど・ども」の用例は四二対四一では同数であるのに、松浦宮では一八三対六、平家では二一対七九八というように、アンバランスが更に顛倒している。

| 対平家物語 | 対松浦宮物語 | 助詞 | |
|-------|--------|-------|--|
| | | 作品 | |
| 1.71 | 1.29 | に | |
| 0.97 | 1.02 | の | |
| 1.65 | 1.10 | を | |
| 1.19 | 1.24 | て | |
| 1.29 | 0.84 | も | |
| 1.24 | 1.11 | と | |
| 0.51 | 0.74 | は | |
| — | 0.81 | (已)ば | |
| 2.19 | 1.58 | や | |
| 1.22 | 1.23 | より | |
| 8.44 | 3.27 | つつ | |
| 32.4 | 0.39 | ど | |
| 0.83 | 11.6 | ども | |
| 0.39 | 0.77 | ぞ | |
| 0.76 | 1.16 | か | |
| 2.56 | 1.25 | など | |
| 0.36 | 1.23 | が | |
| 4.21 | 0.57 | のみ | |
| — | 2.02 | (係)なむ | |
| — | 1.04 | (未)ば | |

元來、「ども」は「ど」に係助詞の「も」が添ったもので、逆説の接続助詞という用法の上では両者は同じであるから、文章の上でこれを人れ替えても、支障の起らない場合が多い。事実、唐物語の以上の数値はA類本によるのであるが、B類本では「ど」に五例が新たに加わる一方一一例減少し、「ども」も一二例増の四減という振幅があって、結局三六対四九になり、C類本でも、結果は四一对四七となつて、別系統間の本文上で両者がゆれられているのが見える。しかし、いずれの系統の伝本に拠つても、唐物語における両者の相異比は、他の二作品とは余りに隔っている。大体に、「ど・ども」の比率は一作品内で偏るのが普通らしく、平安時代の作品でも、蜻蛉日記では一八六対二九と「ど」が多く、紫式部日記では一对四九と圧倒的に「ども」が多いし、おかしなことに、同じ作者の源氏物語では、吉沢・木之下氏索引本によると、「ど」が「ども」の一七倍程もある。助詞が伝本間の異文中でゆれが多いのは、古典作品全般に見られることで、それらが転写の過程で変化を生じることが十分考えるべきであるが、それにしても、こうした余りに著しい交替が何故起るのであるかは、他の助詞群とあわせて、検討を要する問題ではないかと思う。これらは唐物語と松浦宮とを比較したのみで解答の得られる筈もないし、文法論上の各語の分析や、文体論における助詞の位相などからみ合わせて考えるほかはあるまい。

助動詞では、さきの唐物語一〇例以上語の中では、その第一九位が「ごとし」の一二例で、第二〇位の「侍り」と「らむ」は同数の六例になつてしまふ。松浦宮でも順位を言えば、第一八位の「らむ」一九例が前表の最下位で、第二〇位までとすれば、「侍り」一四例、「じ」二三例を加える必要である。そして第二一位に「けむ」一〇例が続いているのが興味深い。助詞と同じに、唐物語の高頻度二〇位まで(同数で二語)の助動詞を列記し、併せて松浦宮の使用率を一とした時の増減を記すと、

| | | | | | |
|----------|---------|---------|----------|----------|----|
| けり(七・五二) | ず(〇・八五) | り(一・二三) | たり(一・一五) | べし(〇・七九) | な |
| り(〇・八七) | む(〇・五八) | き(〇・六八) | す(二・四二) | 給ふ(〇・四三) | けむ |

| | | | | | |
|----------|----------|---------|-----------|----------|----|
| (七・四八) | ぬ(〇・三二) | る(〇・六〇) | つ(〇・七三) | 奉る(一・四〇) | らる |
| (〇・五九) | さす(三・九七) | じ(一・七〇) | ごとし(〇・八九) | 侍り(〇・七三) | |
| らむ(〇・五四) | | | | | |

となる。即ち、最高に増加しているのが約七・五倍の「けり」と「けむ」であり、これは唐物語の文章の調子を形成する上での一つの因子になっているのではあろう。平家物語も「けり」は助動詞中最高の用例を持つが、使用率では唐物語が一・四六倍、「けむ」では三・二四倍といずれも多く用いられている。前述した唐物語の歌物語形態である点が想起される。ついで増加しているのが、四倍近くの「さす」、二倍半程の「す」である。これらは、内容を検討する必要があるものの、「給ふ」が半減し、「る」「らる」が半分近く、「侍り」が三分の二になる一方、「奉る」が幾分増加しているなどの動きを関連させると、或いは敬語表現の上での変化がいろいろと指摘しうるかも知れない。「つ」と「ぬ」が減少する一方で「たり」と「り」が僅かながら増加しているのは、関係があるのかないのか、という点も興味がないではない。唐物語では「けり」「けむ」の増大の蔭で「らむ」「む」「き」のような、時制に関する助動詞が後退している。打消の「ず」は減ったがその代りに「じ」がふえている。しかしこれらの現象も、助詞に比べて助動詞になると、作品の内容に一層接近して考えないわけにはいかない。敬語ということになれば、忽ち人間関係が問題になる。

自立語になると、これは全く話の筋書きと密着してくる。ただ、語彙の中味が筋書きのみによって左右されるとも限らないのが、語彙から作品を見ようとする視点の存在理由の一つではある。或いは各語の多寡を数量的に比較することによって、ただ読み通したのでは読み過ぎがちな問題を見つけうることもある。そこで、既に掲出した表の範囲でも幾つかの徴候を指摘することはできるであろう。唐物語各話の冒頭は「昔」で始まっているので、そのみで二七例になるが、他も併せて五五例になるのは、松浦宮の一二例に比べて使用率の上で八倍近くになる。それは、

前述したように、唐物語の説話指向の一端を示すなどと安直な言い方もし得る。戦いの場面は両作品ともあるにはあるが、松浦宮で「いくさ軍」が四六例のあるのに、唐物語には一つもない。形容詞を見ても、唐物語は「なし・ふかし・はかなし・かぎりなし・たぐひなし・あさし・あさまし・かなし・うれし」の順で用例一〇以上の語がならぶが、松浦宮では「なし・ふかし・いみじ・かなし・あやし・おほし・とほし・おなじ・わかし」の順に用例一五以上の九語がある。第一、二位の順位は同じであるが、使用率から見れば「ふかし」は唐物語の一・六六倍もある。しかしそれよりも、一体何をふかしと言ひ、何がふかしとしているかの中味が重要であろう。ただ使用率ということでは、「あさまし」の六・二三倍、「かぎりなし」の四・二五倍、「たぐひなし」の三・九七倍、「はかなし」の三・一五倍、「うれし」の二・四三倍など、「なし」「かなし」を除いては軒並み増加している。しかし、松浦宮から見れば、代りに「いみじ」「おほし」「あやし」「わかし」「おなじ」などが多く、特に一八例を数える「とほし」が唐物語に一例もないのは、一方が渡唐物語だからであろうか。そう思つて見ると、形容動詞でも松浦宮では「遥かなり」が二七例あるのに、唐物語に七例と使用率が半減しているので、これも関係があるろうか、ということになる。あれこれ関連せしめてもう少し論じたいとは思つたが、必然的に両作品の文学的問題に深く立入っていくことにもなる。寧ろ、私としては望むところなのではあるが、小論では、最後にもう一つ、唐物語の語彙について触れなければならぬ点が残っているし、既に、本節は他に比してふくれあがり過ぎてしまつてゐる。そこで、ここでは問題の指摘にとどめて、次節に移りたい。

六

唐物語の語彙索引を、三系統それぞれの本文を底本にして、区別して検索しうるように制作したのは、便利さもあるが、異なる系統の本文によつて、語彙の上で、A・B・C各類独自の傾向が窺い知れないか、という期待があつた

からである。あわ良くば、それが、三系統の発生経路をも解き明かす一つの鍵になったらと思つたのであるが、結果はなかなか思い通りに事がはこばない。整理した材料を羅列するところから始めよう。まず、三類に分けて、それぞれ一つの類にのみ見る語にいかなる例と、用例数があるかを示す。

○A類本にのみある見出し語（括弧内は用例数・以下同じ）——二六語

- 悪道(1) 浴す(1) 有り付く(1) いやまし(2) うばたま(1) うるはし(1) へ但他本うるせし 恐る(1) へ上二
 段 思ひ計らふ(1) かしつき養ふ(1) 公望(1) 心とどめきす(1) へ但他本心ときめきす 心長し(1) 才
 学(2) 左大臣(2) 調む(1) へ但他本しらぶ 賜ふ(1) へ下二段 なく(1) へ打消・語法 へならかなり(1) へ但他
 本ならかなり 八苦(1) 引きまつふ(1) へ但他本ひきまつ 一國(1) 木石(1) またまた(1) へ衍ナルベシ
 御心迷ひ(1) もろとも(1) をのこ(1)

○B類本にのみある見出し語——四七語

- 挙ぐ(1) あくがれ出づ(1) 嘲り求む(1) あはれさ(1) 浴す(1) あへなし(2) いづく(1) いづくし
 (1) へ但他本うつくし いとかり(1) へ意不通・他本ひとやり 営み言ふ(1) 色・姿(1) うち為(1) 訴へ(1)
 恨み悲しむ(1) おとなし(1) 思ひ合ふ(1) 疎そかなり(1) 片割(1) 変ふ(1) 雁(1) 極め立つ
 (1) 金谷園(1) 梅ふ(1) へ但「梅ゆ」トアルベキ所 嶮し(1) 去年(1) 先立つ(1) へ下二段 さぶらふ(1) へ助動詞
 十二(1) 過す(1) 雪山(1) 宋王(1) へ但他本宋玉 立ち交はる(1) 所から(1) 所せし(1) 飛びかへる
 (1) 計る(1) 不死(1) 不老の薬(1) 古す(1) 褒め言ふ(1) 交ふ(1) 坐す(1) へ但他本おはします
 参らす(1) へ助動詞 八の苦しみ(1) よそ目(1) 霊(1) 忘る(1) へ四段

○C類本にのみある見出し語——六一語

- 罨(1) 辺り(1) 浴す(1) へ四段 うち抱く(1) うち言ふ(1) うち振る(1) 疎む(1) 思ひ留まる(1)

| | | | | | | | | |
|--|---------|----------|---------|------------|---------|---------|------------|---------|
| | 思ひ放つ(1) | 降す(1) | 御方(1) | 悲しみ泣く(1) | 軽ぶ(1) | 口ずさぶ(1) | 雲・霧(1) | 紅・紫(1) |
| | 怪し(1) | 声(1) | 栄え(1) | 差し入り音なふ(1) | 悟る(3) | 慕ふ(1) | 榻(1) | 為成す(1) |
| | 舜(1) | 退く(1)へ四段 | 責め問ふ(1) | 太公望(1) | 立ち遅る(1) | 賜ふ(1) | つらし(1) | 飛び去る(1) |
| | なほなほ(1) | 馴れ睦る(1) | ぬばたま(2) | 八の苦(1) | 晴れ間(1) | 東隣り(1) | 日暮し(1) | 昼(1) |
| | 見る(1) | まさ鏡(1) | 見おろす(1) | 見替ふ(1) | 見守る(1) | めぐらし(1) | 乳母(1) | 萌え出づ(1) |
| | たり(1) | 物見(1) | もはら(1) | 八声(1) | 山際(1) | 湯(1) | 行き向ふ(1)へ二段 | ゆゆしげ(1) |
| | 常ぶ(1) | 業(1) | 尾(1) | 折節(1) | | | | 世の |

即ち、唐物語における本文系統A・B・C三類の特有語は、二六語・四七語・六一語、と類を追って増加しているが、個々の語の用例を見ると、どの類の語も殆んど一例で、A類では二例が三語、B類では二例が一語、C類でも二例が一語、三例が一語という有様であり、三類合計二三四語の内、一二八語九五・五%が用例一の語によって占められている。大体に用例が一語であることは、仮にその語の存在が或る意味を持つものであるとしても、偶然の場合、具体的には転写上の事故によると考えることもできてしまう。たとえば、B類のみに見える「雁」の語は、それ自体別段の意味を持ちそうにないが、この語は、唐物語第九話の張文成と則天武后とが、一度かぎりの密会のあとの状態として

文つたふ雁の道たになかりければ

という一節として登場する。雁の使いは漢の蘇武の故事に基づくの言うまでもないことで、それを古歌にありふれた「雁の使ひ」を避けて「雁の道」としてあるところに面白さを感じたとしても、A類本本文を見ると、

ふみつたふはかりのみちたになければ

とあって、C類本も、右の「みち」が「道」であるだけの相異であるのを見ると、考えざるをえない。「文伝ふばかりの道だにな」という「は」の一字が写し落されれば、「雁の道」は忽ち誕生してしまうからである。ただこの

場合、「伝ふ」が「伝ふる」とあるべきだという問題は措いての話である。

次に、以上の語を見渡すと、△ V内に注記したように、明らかに各底文の誤写から生じたと思われるような語や、他に見ない活用形を持つ語がある。「うばたま」「むばたま」「ぬばたま」や「まそ鏡」「ます鏡」なども誤写とは言えないが、ほぼ軌を一にすることで、特有語としては除外して考えた方がよい。また、「八の苦しみ」「八苦」「八の苦」などは索引の語の取りようによっては、すべて「やつくるしみ」としてしまえる場合であり、「色・姿」「雲・霧」「紅・紫」などは、連語を見出し語としているからである。複合動詞も、組み合わせの問題であるから、C類本にやや多いからと言って、俄かに結論も出したい。

三例を有する唯一の語は、C類本のみに見える「悟る」であり、いずれも第十八話にある。

1 國のまつりごとのすみにごれるをまさとり、玉はざりけり。(三四⑤)

2 此時にうへ楊貴妃のまぬかるまじき事をまさとり、玉ひぬれば、(三七⑩)

3 五のおとろへさ、とる事なければねがふべきにもたらずまれてもよしなし。(四七⑥)

右の1と2の「悟り」の部分はA・B類とも「しらせ」「知せ」であり、「知らせ給はざりけり」「知らせ給ひにければ」となるが、3もA・B類は共通に「さる」と書かれ「と」が欠けた形で、「五つの衰へ避る事なければ」と異なっている。「悟る」が確かに、第十八話のみに三語も見えるのは面白く、特に二例は、他系統本みな「知らせ」であるのも偶然とは思いいくないが、さりとて、「悟る」という語は源氏物語に三例、松浦宮に一例、平家にも五例見える語で、別条はありそうにない。ただ「悟り給ふ」と「知らせ給ふ」とでは、主語が玄宗皇帝であるだけに、敬語法としては後者が適当であると言えないことはない。しかし第十八話のA類本を通覧しても、「みつからの御まつりことをこたらせ給けり」の表現もあれば、「御門も色にめてかにのみふけり給へる御心のひまなさにや」「ことのほかはに御気色かはりにけり」のように、時には述部に全く敬語を欠くことさえあるから、敬語法を理由として、C類本の

「悟る」を後人の改変本文により生じた語、と指摘することはできない。「片割れ」も言葉のみを見ると近世へかけての用法を想起しがちであるが、ここは「徳言分鏡」の鏡の片割れで、片割れ月の例をあげるまでもなく、また問題は残りそうにない。

かくして、あれこれ消去していくと、以上の例の中から、結局、三系統の発生経路を明らかにするのはおろか、それぞれの類の特徴らしきものも、殆んど浮上してこない。尤も、以上の整理はなお不十分なのであって、一類のみに見える語の逆の、たとえば、A類のみに見えない語（従ってB・C類に見える語）という方法で、抽出しうる三群の語彙についても見るべきではあろう。しかし、もう例示するのは省略しよう。それは、

A類本のみに見えない見出し語——一三語

B類本のみに見えない見出し語——四一語

C類本のみに見えない見出し語——三四語

の合計八八語であるが、用例各一の語が圧倒的に多いことは、さきの場合と同じである。即ち、私の目論見というか、語彙による本文系統の分類の試みは、労多くして完全に失敗に終わったのである。

一つの類の本文にある語とない語、という整理の方法は、調査の第一段階である。そこで、いずれの類にも見える語の使用率のゆれによって徴候を検すれば、相互に然るべき用例数があるから、更に微妙な動きも察知しうるかも知れないが、一つ二つの語に関しては、前節でも触れたような動きを時に見せるものの、全体としては、事柄が複雑になつてしまう。そして、個々の語については、索引にすべて出入りを表示したのであるから、今は資料の提供にとどめて、唐物語の問題にとどまらず、後考を俟ちたいと思う。

註

- 1 拙稿「浜松中納言物語の夢(上)―その語彙の頻度について―」『芸文研究』18号 昭39・9
- 2 拙稿「浜松中納言物語とその語彙の性格―特にその考察に至る作品と語彙との関係について―」『鶴見女子大学紀要』3号 昭40・12
- 3 稻賀敬二「寝覚・浜松の位置―位置づけの前提条件の一考察―」『国語と国文学』36巻4号 昭34・4
- 4 大野晋「基本語彙に関する二三の研究―日本の古典文学作品に於ける―」『国語学』24集 昭31・3
- 5 浅見徹「古代の語彙Ⅱ」『講座国語史3 語彙史』所収 大修館書店 昭46・9
- 6 滝沢貞夫「古今集の用語」『国文学』2巻7号 昭32・7
- 7 金田一春彦・清水功・近藤政美『平家物語語彙索引』所収「使用度数表」学習研究社 昭48・4
- 8 角井英子「源氏物語における訓点語彙考」『女子大國文』37号 昭40・5
- 9 宮島達夫『古典対照語い表』所収「統計表」笠間書院 昭46・9
- 10 宮島達夫「総索引への注文」『国語学』76集 昭44・3
- 11 宮島達夫「語るの類似度」『国語学』82集 昭45・9
- 12 水谷静夫「延べ語数と異なり語数との関係」『計量国語学』3号、12号 昭32・11、昭35・3 「二つの語彙に対する標本延べ語数と共通異なり語数との関係」『計量国語学』12号 昭35・3
- 13 註4に同じ
- 14 山本トシ「平安時代和文作品の語彙研究(上)(下)」『学習院大学国語国文学会誌』13号、14号 昭45・3、昭46・3
- 15 大野晋「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」『国語学』87集 昭46・12
- 16 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」『東京大学出版会』昭38・3
- 17 拙著『日中比較文学の基礎研究』第一章「唐物語序説」 笠間書院 昭49・1
- 18 註2に同じ
- 19 菅根順之「松浦官物語総索引」 笠間書院 昭49・9
- 20 萩谷朴「松浦官物語」 角川書店 昭45・5

一 音節語の名詞の運命

一

一音節語の名詞とは、例を以て先ず示すならば、木とか手とかいう類の、一音節からなる名詞である。又、拗音が果して日本語にあった音韻であるかどうかは問題であるが、蛇とか茶も一音節であってみれば、それは、仮名の一つの文字で表示しうる名詞とも限らない。そう考えてみると、私どもの日常茶飯の会話にも、「夜ガアケタ」「血ガ出タ」「手ヲ洗エ」「居ヲ構エル」などと、この名詞が頻りに出てくるようであるが、その数は、無制限という訳にはいかないのである。一体、日本語に音韻上区別しうる音節がどれ程存在するかは、正確には、現代と上代というように、時代によっても異なるし、地域的にみても、各地方によって変化があるから、それぞれに若干の異同はあるけれども、拗音を含めても、その数は知れている。又、同音異義の語も、それが特に一音節であってみれば、そう多く生じては他と区別出来ないであろうし、自然、この面での制限を受けるのも止むをえないが、それらは、必ずしも、すべての点について、多音節語と本質的な相異を示すものではない。確かに、一音節語は組み合わせがない点で他と異なるが、組み合わせによって、超加速度的に増大する多音節語の可能的語彙量というものも、単に数量だけならば、やはり相対的な問題に過ぎない。更に、両者の間には、

出入りというか、密接な関係もあって、一音節語という特殊な面を追求する事が、同時に日本語一般の問題にもからんでくるので、この一群の名詞における言語現象の諸相を検討する事によって、普遍的な問題を抜き出すのも可能であろう。結論として至るに至らぬは別として、考えを進める事にしよう。

一一

我が国最古の分類体漢和辞書である倭名類聚抄の和訓から、^{註1}単独に表示された一音節語の名詞を抽出してみると、(狩谷掖斎の箋注倭名抄をも含めて、箋注本のみにある語には*印を付した。)

畔^ナ 臙^イ 鷓鴣^ウ 江^エ 柄^エ 荏^ニ 覆^フ 鹿^カ 蚊^カ 綺^キ 葱^キ 筍^ケ 籠^コ 粉^コ 海鼠^ク 罌^コ 羊蹄菜^シ 紗^セ 洲^ス 酢^ス 巢^ス 瀬^セ 湍^セ 龙蹄子^シ 酥^ソ 田^テ
 乳^ニ 血^ケ 茅^チ 津^ツ 戸^ト 斗^ト 菜^{サイ} 丹^ニ 沼^チ 根^ネ 野^ノ 幅^フ 篋^ケ 齒^シ 翳^ウ 羽^ウ 葉^エ 氷^ヒ 目^メ 翳^ウ 杆^カ 械^ケ 廬^ロ 氷^ヒ 漿^シ 槽^ソ 戸^ト 邑^エ 之^シ 処^ト 舳^ソ 綵^{サイ} 帆^フ
 穂^ホ 魔^マ 鬼^キ 軀^ク 箕^ヒ 猫^ネ 鱈^ダ 妻^メ 裳^モ 藻^ソ 屋^ヤ 舍^シ 幅^フ 箭^{セン} 温^{オン} 泉^{セン} 柚^ユ 羅^ラ 麩^フ 瓊^{ジュ} 輪^{リン} 井^{エイ} 蛄^コ 蟾^{チン} 蘭^{ラン} 猪^ヂ 餌^エ 麻^マ 緹^{テイ} 尾^ビ 兩^{リウ} 節^{セツ} 間^{カン}

(^{ハヨウ}兩節間は箋注本になし)

の以上八十語^{註2}にのぼる。そしてこの半数近くは、柄^ナ 蚊^カ 田^テ 血^ケのように、現代にも全くそのままの形で残っているか、又、粉^コのように、変化された表現と並行して使用しうる状態になっているし、他方、残りの過半も、元来が稀用の語であったり、現代の日常生活から遠い理由で用語から隔っている数種の語を除けば、殆んどが、その固有の音節を留めた形で変化し、残存している。

問題を展開していく上の障害にならない範囲で、想像が許されるならば、この変化というものは、一音節語の名詞が辿ってきた道について、ほと二つの示唆を与えてくれる。即ち、音価の上での変化を別にすれば、千年後の今日に至るまで、全く形を変えないで残っているというような、強靱な語彙の生命力を示している反面、とかく変化しようとする、それも、固有の音節を残したまゝで多音節化しようとする傾向が認められるというように、この一音節語の名詞には、矛盾した両面の性格があるのではなからうか。

一例をとれば「葱^キ」がある。倭名抄では、

葱 唐韻云葱 韮^音 葷菜也 本草云葱基 冷葉熱^{和名} 紀

とあり、明らかに今日の「註4ヘネギ」であるが、元來の「註4ヘキ」に、根を意味する「註4ヘネ」が添加されて、多音節化したのであろう。これは単なる想像ではない。「註4葱」には、古くから「註4ヒトモジ」という女房詞があり、それが一つの文字で表示されるもの、つまり一音節語である事を自ら語註5っているが、他方、「註4シロネ」なる女房詞も有力であって、現在、大分県などの方言で「註4ヘネジロ」と呼ばれているのも、共にその白い根を食するの註6に由來している。無論、直接に、「註4シロネ」の「註4ヘキ」と言うことから「註4ヘネギ」になったとは直ちに断じえないが、「註4ヘネ」が根であるのを証するには十分であらう。「註4ヒトモジ」と言い「註4シロネ」と呼ぶのも、所詮はその一音節語の「註4ヘキ」を避けたからにはかならぬので、これらが女房詞、いわば婦人語に属するのは、一音節語の持つ音感が、優美さに欠けるとか、発音しにくいとかの点があるのであろう。そして、発音がしにくいという事から、婦人語にやや共通した点のある小兒語において、これがどのように受け取られたかなども、後節の問題として、考えておかねばなるまい。

多音節化の傾向は、既に倭名抄内部に於ても見られる。「註4晔」は箋注倭名抄では和名が

久路、一云阿

であるが、古典全集本では

晔 陸詞曰晔音半田界也和名久路一云阿世

と、今日の「註4ヘアゼ」になっている。又

羽 舊字 唐韻云羽音禹和名波

とある同じ丁に

翮 爾雅集注云羽本曰翮下章反字亦作翮和

名八 一云羽根也

とあり、「註4ヘハ」と「註4ヘハネ」を一応區別しているが、今日「註4羽根」と言えば、「註4羽」と全く異なる所がない。

ところで、言語の変遷には、もとよりそれ自身の特質、傾向とか、音韻上の問題による所も多いが、大きな広がりを持つ文化史の面からも左右され、その様相は複雑を極めるので、以上の如く、倭名抄掲載の言語と、現代の日常語とを、ポツリと点線的に比較してみ

る事が、たとえ同じ操作を何度も繰り返したとしても、どれ程の結果が得られるか疑問であろう。その上、辞書には、生きた言語と死んだ言語とを同一平面上で取り扱う本来的な保守性を持つので、この観察と同時に、実際の時代時代の言語現象を反映した、他の文献をも徴する必要があると思われる。

註1 例えば「兄国 和名江久爾」の兄ニの如きはとらない意である。

註2 この他、地名として 勢 多 津 比 穂 乎 がある。

註3 例えば「粉」はハコナフとも言うがハコフとしても使用されている。

註4 ハナガネギフという言い方は、近代になってハタマネギフが舶来してから生じた呼び名に過ぎない。

註5 同じ女房詞のハフタモジフというのはハニラフを意味し、それが二音節語である事を表示している。

註6 現在、関東人はネギの白い部分を好んで食べ、関西人は青い部分を賞用するようであるが、古来、そのいずれにしろ、感覚的にその白い根に衆目が集つたであろう事は、想像にかたくない。なお、白い部分は、植物学的には当然根でなくて莖であろうが、土の中にある点で、根としてとらえられたのである。

二

語彙の研究において、その使用頻度と変化との関係の研究は興味がある。一般に、使用頻度の高い語彙程その生命は長いと解されているが、一音節語の名詞に関しても同様であるかどうか、所謂文学作品の時代系列の中から、近年、特に多く出版された用語総索引の類を利用して、その現象を観察してみよう。次に、少し煩わしいが、各作品別の用例と使用数を五十音順に配列してあげるが、ただ、遺憾な事には、公刊されている索引のみを利用するので、各時代の作品を自ら選ぶ訳にかず、特に鎌倉時代以降が全くの手薄で、擬古文である徒然草一つではどうにもならぬが、今は致し方ない。作品は

上代Ⅱ古事記（訓読語を含む）日本書紀（字音仮名表記分のみ）万葉集

中古Ⅱ竹取物語、古今集、源氏物語、紫式部日記 更級日記

中世Ⅱ徒然草

| | | |
|----|------|----|
| き乙 | (城) | 2 |
| き乙 | (木) | 4 |
| け乙 | (木) | 1 |
| こ甲 | (子) | 19 |
| し | (磯) | 1 |
| し | (羊蹄) | 1 |
| せ | (夫) | 1 |
| せ | (兄) | 3 |
| ち | (父) | 1 |
| て | (手) | 6 |
| と | (間) | 1 |
| な | (菜) | 1 |
| な | (魚) | 1 |
| な | (名) | 1 |
| な | (中) | 1 |
| ぬ | (瓊玉) | 1 |
| ね | (根) | 1 |
| の甲 | (野) | 2 |
| ひ甲 | (日) | 1 |
| ひ甲 | (桧) | 1 |
| ふ | (乾) | 1 |
| へ甲 | (辺) | 2 |
| へ甲 | (家) | 1 |
| へ乙 | (瓮) | 1 |
| へ乙 | (上) | 2 |
| ほ | (秀) | 1 |
| み甲 | (海) | 2 |
| み | (実) | 2 |
| め甲 | (女) | 1 |
| め乙 | (目) | 2 |
| も | (藻) | 1 |
| も | (姜) | 1 |
| え | (枝) | 2 |
| よ | (夜) | 1 |
| よ | (世) | 2 |
| る | (猪) | 1 |
| を | (命) | 1 |
| を | (緒) | 1 |

○日本書紀

| | | |
|----|-------|----|
| み乙 | (実) | 3 |
| め乙 | (目) | 4 |
| め甲 | (女・妻) | 12 |
| め | (海布) | 1 |
| め | (芽) | 1 |
| も | (裳) | 2 |
| も | (喪) | 1 |
| や | (矢) | 23 |
| や | (屋) | 4 |
| や | (箭) | 1 |
| ゆ | (湯) | 1 |
| よ甲 | (夜) | 9 |
| よ乙 | (世) | 1 |
| る | (猪) | 5 |
| る | (井) | 3 |
| ゑ | (餌) | 2 |
| を | (緒) | 8 |
| を | (峽) | 1 |
| を | (男・夫) | 7 |
| を | (尾) | 4 |
| を | (麻) | 2 |

| | | |
|----|-------|----|
| あ | (畔) | 3 |
| う | (鶉) | 3 |
| え乙 | (好) | 1 |
| か | (鹿) | 1 |
| き乙 | (木) | 11 |
| き乙 | (城) | 1 |
| こ甲 | (子) | 39 |
| こ乙 | (木) | 1 |
| こ | (海鼠) | 3 |
| こ | (卵) | 2 |
| せ | (瀬) | 3 |
| せ | (兄・夫) | 4 |
| せ | (背) | 1 |
| た | (田) | 3 |
| ち | (血) | 7 |
| て | (手) | 8 |
| と甲 | (戸) | 8 |
| と甲 | (外) | 5 |
| な | (名) | 95 |
| な | (魚) | 6 |
| な | (菘) | 1 |
| に | (土) | 1 |
| に | (丹) | 1 |
| ぬ甲 | (野) | 9 |
| ね | (根) | 5 |
| ね | (音) | 3 |
| は | (刃) | 1 |
| は | (羽) | 3 |
| は | (葉) | 6 |
| ひ | (檢) | 1 |
| ひ乙 | (地名) | 1 |
| ひ甲 | (桧) | 1 |
| ひ乙 | (火) | 16 |
| ひ甲 | (日) | 15 |
| ひ | (械) | 1 |
| へ | (上) | 18 |
| へ甲 | (辺) | 6 |
| ほ | (地名) | 1 |
| ほ | (穂) | 1 |
| み乙 | (身) | 21 |

○古事記

の以上九作品である。

○古今集 (一)内ハ、仮名序・左注・詞書ノモノ

| | | |
|----|-----|----|
| いき | (寝) | 1 |
| き | (木) | 6 |
| け | (毛) | 3 |
| こ | (子) | 17 |
| こ | (籠) | 2 |
| す | (巢) | 6 |
| ち | (血) | 2 |
| て | (手) | 9 |
| と | (外) | 3 |
| と | (戸) | 1 |
| な | (名) | 6 |
| ね | (根) | 2 |
| ね | (子) | 1 |
| は | (葉) | 1 |
| ひ | (火) | 5 |
| ひ | (日) | 6 |
| め | (妻) | 2 |
| め | (目) | 4 |
| も | (裳) | 1 |
| や | (屋) | 9 |
| よ | (節) | 1 |
| よ | (夜) | 4 |
| よ | (世) | 15 |
| ゑ | (絵) | 1 |
| を | (尾) | 3 |

○竹取物語

| | | |
|---|-------|-----|
| ね | (嶺) | 3 |
| ね | (根) | 5 |
| ね | (音) | 28 |
| ね | (哭) | 26 |
| の | (野) | 2 |
| は | (羽) | 2 |
| は | (葉) | 9 |
| ひ | (日) | 161 |
| ひ | (火) | 13 |
| ひ | (氷) | 2 |
| ひ | (袷) | 1 |
| ふ | (節) | 1 |
| へ | (家) | 6 |
| へ | (舳) | 8 |
| へ | (刃) | 88 |
| ほ | (穂) | 17 |
| ほ | (帆) | 1 |
| ま | (馬) | 1 |
| ま | (間) | 76 |
| み | (実) | 21 |
| み | (身) | 53 |
| み | (見) | 11 |
| め | (女) | 3 |
| め | (目) | 50 |
| め | (藻) | 1 |
| も | (裳) | 15 |
| も | (藻) | 1 |
| も | (喪) | 3 |
| も | (妹) | 1 |
| や | (矢) | 3 |
| や | (屋・家) | 3 |
| ゆ | (湯) | 3 |
| よ | (夜) | 144 |
| よ | (世・代) | 31 |
| ゐ | (井) | 2 |
| ゑ | (絵) | 1 |
| を | (峯) | 8 |
| を | (弦) | 1 |
| を | (尾) | 6 |

| | | |
|---|---------|----|
| あ | (足) | 2 |
| い | (寝) | 10 |
| う | (鶺鴒) | 5 |
| え | (枝) | 3 |
| か | (香) | 3 |
| か | (鹿) | 4 |
| き | (地名) | 3 |
| き | (紀) | 3 |
| き | (木) | 14 |
| き | (城) | 1 |
| き | (酒) | 2 |
| け | (筈) | 2 |
| け | (気) | 1 |
| け | (経) | 9 |
| け | (来賈歌) | 1 |
| こ | (兒) | 89 |
| こ | (蚕) | 3 |
| こ | (籠) | 2 |
| す | (酢) | 1 |
| す | (渚) | 3 |
| す | (巢) | 2 |
| せ | (地名) | 2 |
| せ | (瀬) | 63 |
| せ | (夫・兄・弟) | 33 |
| た | (田) | 21 |
| ち | (乳) | 2 |
| つ | (津) | 4 |
| づ | (頭) | 4 |
| て | (手) | 77 |
| と | (戸) | 6 |
| と | (門) | 4 |
| と | (外) | 4 |
| と | (音) | 1 |
| と | (時) | 5 |
| と | (利) | 10 |
| な | (名) | 96 |
| な | (魚) | 1 |
| な | (菜) | 1 |
| に | (荷) | 1 |
| ぬ | (野) | 60 |

○万葉集

| | | | | | |
|---|-------|------|---|------------|-----|
| な | (難) | 2 | い | (寝) | 3 |
| に | (二) | 34 | う | (卵) | 1 |
| ね | (根) | 11 | う | (鶉) | 1 |
| ね | (音) | 153 | え | (縁) | 1 |
| ね | (哭) | 18 | え | (枝) | 4 |
| ね | (子) | 1 | え | (柄) | 3 |
| ね | (寝) | 3 | か | (香) | 58 |
| の | (野) | 19 | か | (賀) | 2 |
| は | (葉) | 10 | き | (木) | 19 |
| は | (齒) | 1 | き | (綺) | 7 |
| は | (羽) | 2 | き | (黄) | 4 |
| は | (端) | 1 | き | (季) | 1 |
| ひ | (日輪) | 32 | ぎ | (義) | 1 |
| ひ | (日曆) | 82 | く | (句) | 2 |
| ひ | (火・燈) | 42 | く | (具) | 11 |
| ひ | (氷) | 4 | け | (氣・趣 病) | 25 |
| ふ | (譜) | 2 | け | (故) | 28 |
| ほ | (穂) | 2 | け | (野) | 1 |
| ま | (間) | 63 | げ | (偈) | 1 |
| み | (身) | 611 | こ | (子) | 81 |
| み | (実) | 3 | こ | (籠) | 6 |
| み | (己) | 3 | こ | (胡) | 2 |
| み | (見) | 21 | こ | (碁) | 15 |
| め | (目) | 215 | さ | (然) | 2 |
| め | (女・妻) | 8 | ざ | (座) | 10 |
| め | (芽) | 3 | し | (師) | 23 |
| も | (裳) | 10 | し | (詩) | 1 |
| も | (藻) | 1 | し | (為) | 6 |
| や | (屋) | 6 | じ | (時) | 2 |
| ゆ | (湯) | 5 | ず | (簾) | 9 |
| ゆ | (由) | 2 | ず | (巢) | 1 |
| よ | (世・代) | 1326 | せ | (瀬) | 17 |
| よ | (夜) | 242 | た | (田) | 5 |
| ら | (羅) | 1 | ち | (乳) | 2 |
| わ | (輪) | 1 | ち | (地) | 2 |
| る | (井) | 3 | ぢ | (地) | 2 |
| る | (亥) | 1 | ぢ | (持) | 1 |
| ゑ | (絵) | 51 | て | (手) | 135 |
| ゑ | (会) | 1 | と | (戸) | 27 |
| を | (緒) | 5 | と | (外) | 25 |
| | | | な | (名) | 102 |

○源氏物語

| | | | | | |
|---|-----|------------|---|------|------------|
| ひ | (火) | 8 | い | (寝) | 3 |
| ほ | (穂) | (1) 10 | え | (枝) | 1 |
| ほ | (帆) | 1 | え | (柄) | 1 |
| ま | (間) | (2) 27 | か | (香) | 23 |
| み | (身) | (10) 84 | き | (木) | (10) 15 |
| み | (実) | 3 | き | (棺) | 1 |
| め | (目) | (1) 21 | く | (句) | (2) |
| め | (女) | (2) | げ | (下) | (3) |
| め | (芽) | 2 | こ | (子) | (1) 1 |
| も | (面) | 3 | こ | (木) | (5) 18 |
| も | (裳) | (2) | こ | (蚕) | (1) |
| も | (藻) | 2 | ご | (期) | 1 |
| ゆ | (湯) | (1) | し | (四) | (1) |
| よ | (世) | (12) 45 | す | (洲) | (1) |
| よ | (夜) | (3) 44 | せ | (瀬) | (1) 13 |
| よ | (節) | 3 | た | (田) | 5 |
| ゑ | (絵) | (2) | ち | (茅) | (1) |
| を | (緒) | 2 | て | (手) | (1) 5 |
| を | (尾) | 1 | と | (門) | 1 |
| | | | な | (名) | (4) 40 |
| | | | に | (二) | (1) |
| | | | ね | (音) | (1) 21 |
| | | | ね | (根) | (1) 5 |
| | | | ね | (嶺) | 1 |
| | | | の | (野) | (4) 24 |
| | | | は | (葉) | (4) 22 |
| | | | は | (羽) | 2 |
| | | | ひ | (日輪) | (1) 6 |
| | | | ひ | (日曆) | (25) 21 |
| | | | ひ | (緋) | 1 |

○紫式部日記

| | | |
|---|------|----|
| ぐ | (具) | 1 |
| け | (氣) | 1 |
| こ | (子) | 1 |
| ざ | (座) | 6 |
| す | (巢) | 1 |
| て | (手) | 4 |
| と | (戸) | 3 |
| と | (外) | 5 |
| な | (名) | 4 |
| な | (難) | 1 |
| ね | (根) | 4 |
| ね | (音) | 1 |
| ひ | (日輪) | 2 |
| ひ | (日曆) | 12 |
| ひ | (火) | 4 |
| ま | (間) | 8 |
| み | (身) | 18 |
| み | (実) | 1 |
| め | (目) | 13 |
| も | (裳) | 19 |
| よ | (世) | 26 |
| よ | (夜) | 23 |
| ら | (羅) | 1 |
| ゑ | (絵) | 3 |

○更級日記

| | | |
|---|-----|----|
| い | (寝) | 2 |
| き | (木) | 8 |
| き | (黄) | 3 |
| こ | (子) | 3 |
| ざ | (座) | 1 |
| す | (洲) | 1 |
| た | (田) | 4 |
| ち | (地) | 1 |
| つ | (津) | 1 |
| て | (手) | 3 |
| と | (戸) | 4 |
| と | (外) | 1 |
| な | (名) | 3 |
| に | (丹) | 1 |
| ね | (音) | 7 |
| ね | (根) | 1 |
| の | (野) | 6 |
| は | (葉) | 5 |
| ひ | (日) | 13 |
| ひ | (火) | 7 |
| み | (身) | 12 |
| め | (目) | 10 |
| や | (屋) | 1 |
| よ | (世) | 29 |
| よ | (夜) | 51 |
| ゐ | (井) | 1 |
| ゑ | (絵) | 2 |

○徒然草

| | | |
|---|-----|----|
| い | (寝) | 2 |
| い | (医) | 2 |
| う | (禹) | 1 |
| え | (柄) | 2 |
| か | (可) | 1 |
| き | (驢) | 2 |
| き | (木) | 16 |
| ぎ | (義) | 1 |
| ぎ | (儀) | 1 |
| く | (九) | 1 |
| く | (句) | 1 |
| ぐ | (具) | 1 |
| ぐ | (愚) | 1 |
| け | (毛) | 4 |
| け | (氣) | 3 |
| こ | (子) | 15 |
| こ | (籠) | 1 |
| ご | (葉) | 3 |
| ご | (期) | 2 |
| ご | (五) | 5 |
| ざ | (座) | 6 |
| し | (詩) | 1 |
| し | (師) | 7 |
| し | (死) | 16 |
| し | (士) | 1 |
| し | (四) | 1 |
| じ | (字) | 2 |
| じ | (躰) | 1 |
| す | (巢) | 1 |
| ぜ | (是) | 1 |
| た | (田) | 6 |
| た | (他) | 7 |
| だ | (攤) | 1 |
| ち | (血) | 2 |
| ち | (地) | 3 |
| ち | (智) | 12 |
| づ | (凶) | 2 |
| て | (手) | 19 |
| と | (戸) | 1 |

| | |
|-----|----|
| (外) | 1 |
| (名) | 23 |
| (号) | 2 |
| (根) | 3 |
| (音) | 2 |
| (野) | 1 |
| (葉) | 3 |
| (刃) | 1 |
| (陽) | 1 |
| (日) | 26 |
| (火) | 8 |
| (非) | 5 |
| (武) | 3 |
| (穗) | 1 |
| (間) | 8 |
| (身) | 58 |
| (目) | 25 |
| (妻) | 1 |
| (矢) | 7 |
| (屋) | 2 |
| (世) | 66 |
| (夜) | 18 |
| (利) | 9 |
| (盧) | 1 |
| (輪) | 1 |
| (絵) | 3 |
| (餌) | 1 |
| (緒) | 1 |

とななねねのははひひひひふほまみめめややよよりろわゑゑを

以上の表によってわかるように

(異り語彙数)

六〇語

(総用例数)

四一一例

古 事 記

三八語

七五例

日 本 書 紀

七八語

一三六六例

萬 葉 集

二五語

一一一例

竹 取 物 語

四九語

五九一例

古 今 集

八一語

三六五〇例

源 氏 物 語

二四語

一六二例

紫 式 部 日 記

二七語

一八一例

更 級 日 記

六七語

四三六例

徒 然 草

と作品の長短により語数、総例数とも変化しているが、その割合は算術平均とはならず、総例数の比ではより大きな振幅を、そして語数では余りに小さい振幅を示している。前者の事実を如何に説明するかは姑く措くとして、後者の場合、一音節語が、同音異語を無制限に発生せしめ得ぬ限り、音韻上のきつい制約を必然的に受けるといふ、始めに考えた条件の現われであろう。それでも九作品を通じて重複した語彙を整理してみると、総異り語彙数は一八四語にのぼる。今、各作品における個々の語のそれぞれの使用頻度は考えずに、如何なる語彙が如何に多くの作品にわたって使用されているかを考察してみよう。これは、同時に各語彙の時代時代の生命をも見

ることになるが、こゝでは、たゞ三作品以上にわたっている一音節語名詞を、順次多いものから示すことにする。(但し、各作品数範囲についてで、各々の中では五十音順による。)

○九作品全部にわたるもの一八語

子^コ 手^テ 名^ナ 根^ネ 日^ヒ 目^メ 世^セ 夜^ヤ

○八作品にわたるもの一三語

木^キ 戸^ト 火^ヒ

○七作品にわたるもの一七語

外^ト 音^{オン} 葉^{エフ} 日^ヒ 輪^{リン} 身^ミ 女^メ 妻^メ 絵^エ

○六作品にわたるもの一六語

寝^ネ 田^タ 野^ノ 実^ミ 裳^モ 屋^ヤ

○五作品にわたるもの一三語

巢^ス 間^マ 緒^オ

○四作品にわたるもの一一語

枝^エ 気^キ 籠^{カゴ} 座^ザ 瀬^セ 羽^ハ 穂^ホ 藻^モ 湯^ユ 井^イ 尾^ビ

○三作品にわたるもの一五語

鵝^カ 柄^カ 香^カ 城^シ 匂^ニ 具^ク 兄^ケ 夫^フ 地^チ 血^{ケツ} 菜^{サイ} 魚^{イサ} 檜^{ヒノキ} 辺^ヘ 芽^メ 矢^ヤ

○二作品にわたるもの一三二語

(用例略)

○一作品のみをみるもの一九九語

(用例略)

合計 一八四語

即ち、多作品にわたる語は限られていて、過半、五作品以上にわたる語彙は僅か二七語註2総語彙数の一割五分に満たない。これは、逆にいえば、広い範囲で使用される一音節語名詞は、使用頻度を別にしても、極く限られていることを示している。国語大辞典の一、大言海には、註3借用語を含めて五一九語の用例が解説されているが、普く使用される語がさ程多くないのを知らねばならない。そして更に気づく点は、範圍とする作品数が広くわたる程、それらの語彙は、現代でもそのまま使用されているか、音韻の転移した同義語が別にあっても、それと並行して猶使用される語が多いことである。註4

三作品にわたる十五語の裡、注目すべき点は

城・夫・兒・魚・檜・辺

の五語が、古事記、日本書紀、万葉集の所謂奈良時代用語に限られている点である。これは二作品以下にのみ見られる語でも

足・畔・好・鹿・紀(地名)・酒・筍・木・経・来・海鼠・卵・磯・羊蹄……

と五一語にも及んでいる。この中には、平安以後の作品に、偶々用例がなかった場合も若干あるが、それは極く僅かと思われ、大部分は奈良時代のみに行われ、語としての生命を早く失ったものと察せられる。そして、今奈良時代三作品のみに用例を持つ五六語を、総例語から除いてみると、それらの殆んど多く(70〜80%)が現在そのまゝか、そのまゝでも使用しうる形で残っていることは、次の推論を与えるに充分である。即ち、奈良時代から平安時代へ入るまでに、一音節語の名詞の多くは転移、変化を受けてしまったが、その時そのまゝで残ったものは、平安時代以後には殆んど失われることなく、長い生命を保ち続けていることである。そして、奈良時代にみえなくて、平安時代に初見される語が多く借用語である点と思わせると、和語の一音節語名詞は、奈良—平安の間にその受難註7時代を経て以来、強靱な生命力をもって、全語彙の一角に順調な運命を保ち続けてきたといえる。

次に、前にあげた各作品の名語頻度表を、見易いように、それぞれの作品内でどの様な順位を持っているか一覽してみよう。用紙の都合で二十六位迄にしたが、勿論便宜的なものに過ぎない。又、語彙数、用例数の少い作品では同一頻度の語、特に一例づつの語が多く、それは五十音順に配列したが、○×印の連続したものは上下がない順位であると見なくてはならない。用例数も、却って絶対数に

惑わされるのを恐れて付さなかった。

作品別一音節語名詞使用頻度順一覧

注 連続セル○印及×印は同数同順位ナルコトヲ示ス。

| 徒然草 | 更級日記 | 紫式部日記 | 源氏物語 | 古今集 | 竹取物語 | 万葉集 | 日本書紀 字音表記分紀 | 古事記 | 作品使用頻度順位 | |
|-----|------|-------|------|-----|------|-----|----------------|-----|----------|----|
| | | | | | | | | | 順位 | 頻度 |
| 世 | 夜 | 世 | 世 | 身 | 子 | 日 | 子 | 名 | 1 | |
| 身 | 世 | 夜 | 身 | 世 | 世 | 夜 | 手 | 子 | 2 | |
| 日 | 日 | 裳 | 夜 | 夜 | 手 | 名 | 木 | 矢 | 3 | |
| 目 | 身 | 身 | 目 | 日曆 | 屋 | 児 | 兄 | 身 | 4 | |
| 名 | 目 | 目 | 音 | 名 | 木 | 辺 | 城 | 上 | 5 | |
| 手 | 木 | 日曆 | 手 | 間 | 巢 | 手 | 野 | 火 | 6 | |
| 夜 | 音 | 間 | 名 | 野 | 名 | 間 | 辺 | 日 | 7 | |
| 木 | 火 | 座 | 日曆 | 葉 | 日 | 瀬 | 上 | 女・妻 | 8 | |
| 死 | 野 | 外 | 子 | 木 | 火 | 野 | 海 | 木 | 9 | |
| 子 | 葉 | 手 | 間 | 香 | 目 | 身 | 実 | 野 | 10 | |
| 智 | 田 | 名 | 香 | 木 | 夜 | 目 | 目 | 夜 | 11 | |
| 利 | 戸 | 根 | 絵 | 音 | 毛 | 夫・兄 | 枝 | 手 | 12 | |
| 火 | 黄 | 火 | 火 | 目 | 外 | 世 | 世 | 戸 | 13 | |
| 間 | 子 | 戸 | 二 | 瀬 | 尾 | 音 | 木 | 緒 | 14 | |
| 師 | 手 | 絵 | 日輪 | 穂 | 血 | 哭 | 磯 | 血 | 15 | |
| 他 | 名 | 日輪 | 故 | 火 | 根 | 田 | 羊蹄 | 男・夫 | 16 | |
| 矢 | 寝 | 具 | 戸 | 日輪 | 妻 | 実 | 夫 | 魚 | 17 | |
| 座 | 絵 | 氣 | 氣 | 手 | 籠 | 穂 | 父 | 葉 | 18 | |
| 田 | 座 | 子 | 師 | 根 | 寝 | 裳 | 間 | 辺 | 19 | |
| 五 | 洲 | 巢 | 見 | 田 | 戸 | 木 | 菜 | 外 | 20 | |
| 非 | 地 | 雛 | 木 | 寝 | 子 | 火 | 魚 | 根 | 21 | |
| 毛 | 津 | 音 | 野 | 下 | 葉 | 見 | 名 | 猪 | 22 | |
| 氣 | 外 | 実 | 哭 | 実 | 裳 | 寝 | 中 | 兄・夫 | 23 | |
| 若 | 丹 | 羅 | 瀬 | 面 | 節 | 利 | 瓊玉 | 目 | 24 | |
| 地 | 根 | | 碁 | 節 | 絵 | 経 | 根 | 屋 | 25 | |
| 根 | 屋 | | 根 | 句 | | 葉 | 日 | 尾 | 26 | |

表を一覧して先ず気づくのは、作品の時代、内容、形態が各々大きく異っているのに、この順位、とりわけ平安時代以降がお互変りばえがしない点であろう。ベスト10、ベスト20に横線をひき、ベスト10に入る語彙を指数2、ベスト20を指数1として整理すれば、各

語彙の頻度を、全体の作品を通じて比較することが出来る。

○ 指数17のもの—二語

日^ヒ 夜^ヤ

○ 指数15のもの—一語

世^セ

○ 指数14のもの—五語

子^コ 手^テ 名^ナ 身^ミ 目^メ

○ 指数11のもの—一語

木^キ

○ 指数10のもの—二語

野^ノ 火^ヒ

○ 指数9のもの—一語

間^マ

○ 指数7のもの—一語

音^ネ

即ち、わかりやすく指数4以上の語を順位に従って配列すると(連続せる○×印は同順位である事を示す)

○ 日^ヒ 夜^ヤ 世^セ 子^コ × 手^テ × 名^ナ × 身^ミ × 目^メ 木^キ 野^ノ 火^ヒ 間^マ 音^ネ 辺^ヘ × 戸^ト × 根^ネ 葉^ハ 絵^エ ……

となる。これはなんと、前の作品範囲順語彙に類似しているのであらうか。かの順は、

○ 子^コ ○ 手^テ ○ 名^ナ ○ 根^ネ 日^ヒ 目^メ 世^セ 夜^ヤ × 木^キ × 戸^ト × 火^ヒ 外^{ソト} 音^ネ 葉^ハ 日^ヒ 輪^{リン} 身^ミ 女^メ 妻^{ツメ} 絵^エ …… (七作品以上にわたる語)

で、両者のベスト18^{註11}の裡、実に15語の

木^{*} 子^ヲ 手^ヲ 戸^ト 名^ナ 根^{*} 音^{*} 葉^ヘ 日^ヒ 火^ヒ 身^シ 目^メ 夜^ヨ 世^ヨ 絵^ヱ
 (五十音順)

が共通している。これは範囲に於ても、頻度に於ても広く高く使用される語で、これが例外なしに今日使用されることは、前にも述べた通り、一音節語名詞の生命が、全くその使用頻度と使用範囲によって決定され、且、頻度と範囲が全くスライドすることを証明している。

ところで、使用頻度と作品範囲の広さが一致するのは、何も手續を経て証明する迄もなく、始めから自明の事である。何故なら、頻度が高ければ、ある作品にその語が含まれる確率も又高いのが当然で、先に「頻度は別にしても」と述べたのは、「どちらか一方を見れば同じだから、今頻度を別にして」の意で、ただ予想される理論が事実により証明しえた点、無駄な操作ではなかった。頻度の最も高い語が、日と夜であるのも興味深い。

一音節語名詞が奈良時代から平安時代へ入る間に大分淘汰された事実のあるのは既に述べたが、頻度指数を、古事記、日本書紀、万葉集の奈良時代三作品のみによって整理すると、語彙の順位は全体のと若干変ったものとなる。指数順位のみを示すと、

子^コ 野^ノ 木^キ 日^ヒ 辺^ヘ 名^ナ 上^{ウヘ} 身^ミ 夜^ヨ 夫^ウ 兄^{ケイ} 手^テ 実^ミ 目^メ 世^ヨ 瀬^セ 火^ヒ 間^マ 海^{ウミ} 女^メ 妻^{ツメ} 矢^ヤ ……

となるが、この裡奈良時代以後用例を見ないのは、

辺^ヘ 上^{ウヘ} 夫^ウ 兄^{ケイ} 海^{ウミ}

の僅か四語で、残りの十六語中十語が先の全作品高頻度広範囲十五語に共通する点、やはり、奈良時代に使用頻度の高かった語彙は、その受難時代に於てもよく生命を保ち続けたことを証している。

ここで、実作品の用例と、前節の倭名類聚鈔のそれとの關係を一言したい。紙幅の都合などで、余り詳しくは考察しえないが、参考になる事実のみを述べておこう。

即ち、倭名抄所出分八六語、九作品綜合所出分一八四語中、共通してある語は五一語、倭名抄所出語の約六割に当る。そして、共通する語の多くが奈良時代のみの語か以来の語であるのも、倭名抄の成立、その目的、内容を考えれば当然であろう。又、先の高頻度広範囲十五語の倭名抄に見える語が、

戸根葉身

の僅か四語に過ぎぬのは、かの十五語に物質の名でない名詞が含まれているからではあっても、注目して良い。

註1 元來動詞の語幹であるが、その機能から、文法上屢々名詞に入れられる語、即ち、寝、見の類をも含めた。

註2 $\frac{184}{27} \times 100 = 14.6\%$

註3 勿論、中国からの借用語である。

註4 夜はハヨルVともハヨVとも使用されているし、世も、世の中、世間などの派生語にまじって、共にその生命を保っている。

註5 酢など、万葉集のみにしか用例を見ないが、平安以降使用されていなくなった訳ではない。

註6 借用語であっても、日本の作品で使用されていれば日本語に違いはないが、この和語とは、便宜的に、借用語を除いた意に用いた。

註7 受難時代という言い方には色々問題があり、何故に大きな変化がここで起っているのか、資料自体の検討から始めて考える必要があるが、小稱の表題である「運命」という言葉に調子を合せて、今使ってみた。

註8 この場合、その作品内の用例数の順位を以て頻度と考える。そこで、数字は一作品内に於てのみ相対的意味を持ち、他作品とでは比較の対象にならない。

註9 表で10位以下に記されてあっても、10位以内と同順位符号、即ち○×印がつけてあれば、ベスト10に入る。ベスト20の場合も同様である。又表に記されてなくても、日本書紀の如く、一例がすべて14位に入るものには指数1となる訳である。なお、順位そのものを指数として計算せず、それを大きく群に分けて考えるのは、順位の数値自体が何等の意味を持たない上に、数値が不必要に多く且細かくなって、全体を見通せないからである。その他の理由もあるが、あとは省略に従いたい。九作品全部を通して十位以内に入る語があれば、それは指数18となる。

註10 野は、従来上代に限ってハヌVと訓む場合が多かったが、最近の万葉集の研究などではハノVと訓む説が有力なので、すべてハノVに統一した。

註11 両者の数をそろえる意図はあったが、かく一致したのは偶然である。

註12 勿論、調査した九作品の範囲での事で、徹密に以後の用例がないとは言えない。しかし、所見があったとしても、頻度が極めて小さい、とだけとは言えよう。

註14 地名をも含めた。実作品の用例がそれを含んでいるからである。

註14 殆んどと言って良い、九作品用例中では、奈良三作品に見えぬ共通語は僅か七語で、それも、他の上代の文献に、所見が当然期待されそうな語ばかりである。参考にあげれば、柄、綺、菴、茅、鹿、羅、輪、である。

四

前節では、一音節語の名詞のうち、どの語が最も大きな使用頻度を持つかを調査して、その生命力との関係をほぼ明らかにしたが、本節では、そのままの生命を保ちえないで、或は死語となり、或は音韻の転移、変化を受け、或は派生語に本家を奪われる運命を辿った語について考察を加えよう。それは多音節化の道であるが、第一節でも述べた「葱」↓「へネギ」のように、それが行われた場合、添加した音節の意味、又事情がどうかであるか、即ち、多音節化名詞の語源がすべて明らかになる訳ではない。それらには、明証を充分得るものもある反面、色々の可能性のみ考えられている語もある。又、多音節化が、各語に關していつの時代に行われたかは、それを文献で溯りうる限り辿ってみれば、ある程度はつきりするであろうが、俄に出来る操作ではない。そこで、本節では若干の時代的類推を試みるにとどまるが、同じ多音節化といっても、子細に検討すると、自らその中に様式が認められる。今、その個々の例をあげよう。

(1) 同じ音節を一つ添加し、繰り返すことによって二音節化する語

即ち、

父 ↓ 父
乳 ↓ 乳

がそれである。この変化には、小児語、婦人語の要素が入っているのではないかと考えているが、次節で検討するとして、父は早く奈良時代に消失転移したようで、乳は平安以後にもとどまった。

(2) 類の一を、その類の総称をも含めて固定された語

即ち、

猪のしし ↓ 猪
檜の木 ↓ 檜
榎の木 ↓ 榎

などの類で、元來は、「桜の木」とか「梅の木」と現在いう様に類稱の「木」や「しし」の意識が別にあつたが、遂には一語として固定してしまつた。

(3) 類の一を、他と区別する修飾語(主としてその属性)を含めて固定した語

即ち、

蚕 → 蚕

海鼠 → 海鼠

卵 → 卵

の類で、元來は、飼ふ所の^{註1}コであり、なまの^{註1}コであり、玉の^{註1}コであつたのが固定したと思われる。

(4) 名詞の表示する対象の一部分の名が、対象全部の意になつた語

即ち、

羽 → 羽根

畔 → 畔

の類で、両例とも既に初節で触れた通り、羽根は羽のつけ根、根本であつたものが、畔^{畔註2}は畔^{畔註2}の畝であつたものが、それぞれ全体の意になつたのであろう。そして後者が倭名抄に双方を異本によつて見ることが、述べた。

(5) 名詞の表示する対象の一種類の名が、対象全部の意になつた語

即ち、

鹿 → 牡鹿

棺 → ひと棺

の類で、大嘗海の所説によると、牡鹿は牝鹿に對するといふ。牝鹿の對ならば牡鹿であるべきようにも思ふがどうであらうか。仁徳紀三十八年七月の条には「牡鹿」の例がある。猪 → 猪の例同様鹿も「鹿のしし」の形の古語があつて、へしかのへしはへし

の〈ヘシ〉かとも考えられるが、勿論何の根拠もない。〈ヘヒツギ〉には景行紀四十三年の条に「棺椁」とあり、ともかく両者とも早くから、〈ヘシカ〉、〈ヘヒツギ〉の変化をしていたものと思われる。

(6) 全く別の源を持つ語に変化した語

即ち、

氷 \downarrow 水
魚 \downarrow 魚

の類で、氷は、倭名抄に

氷 水寒凍結也和名比文
云古侯刺

とあって、両者併用が古くから行われていることを知るが、〈サカナ〉の〈ナ〉は〈魚〉ではなく、〈酒菜〉であると思われる。魚、そのものの多音節化として、美称、「真魚」があったが、今日、「まないた」として残っているに過ぎない。

大体、語源を明らかにしうる多音節化の様式は以上の如くであるが、この他にも延音註となるもの、音韻転化したもの等考えられ、現代口語と関連せしめれば更に各様式が見られるが、それらは次節で述べよう。以下、参考までに多音節化の各例を列記するが、これらは以上の一様式に含まれるか、又は語源が明確を欠いて、わからぬものもある。語源は思いつきでなされてはならぬが、私が参照した大言海のそれも、どうかと考えられる解釈註であった。

| | | | | | | |
|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| 枝 \downarrow 枝 | 籠 \downarrow 籠 | 外 \downarrow 外 | 門 \downarrow 門 | 端 \downarrow 端 | 上 \downarrow 上 | 海 \downarrow 海 |
| 餌 \downarrow 餌 | 沼 \downarrow 沼 | 夜 \downarrow 夜 | 簾 \downarrow 簾 | 等々 | | |

一方、一音節語の名詞に於て、対象そのものが、その後の日常生活から隔たるか、対象自体の変化による別称の発生で、死語となる例も少なくない。羅の如き語も、倭名抄所見の動植物名の多くもそうであるが、これは一音節語に限った事ではなく、他の多音節語名詞一般に及ぶ問題であろうから、本論の目的からみて、省略に従って良いであろう。そして一音節語の名詞が、どの様式で多音節化したとしても、その原因となる所は、音韻の面での特殊性によるのであろう事は、容易に想像出来るが、逆にこうした多音節化の現象面

から、一音節語のやや不安定な音韻を説明する事も出来よう。

註1 カールグレンは、かひは歟^カカヒだとしているが、とらない。

註2 これには「間塞ノ義ニヤ」という倭訓栞の説もあるが、信するに足りない。

註3 例えば、羊蹄^{アヒタ}ーシイ、梭^{アヒ}ーヒイ などがある。

註4 例えば、粉^コの語源は、熟^{マツ}の語幹によるように大言海は説明するが、さすればハコナVは当然ハコVより以前にその用例を見、ハコVは逆に一音節語の二音節化になる筈であるが、事實は反対である。

五

ここまで、私は一音節語の名詞を、時間というタテの関係を上下し、一方でその生命力の強さと、一方でその不安定な性格という矛盾した両面を考察してきた。そこで、今度は、現在の場に於て、彼等がどんな広がりを見せ、どのような位置を保っているのか、ヨコの関係を併せ考えて、解剖を加えてみよう。

現代用語、と一口に言っても、まだ文語と口語の区別のほか、標準語と方言の差異や、婦人語、小児語、職業語等、さまざまな分野がある。ここでは、特に口語の中で、所謂俗語^{註1}、方言、婦人語、小児語について触れてみたい。

現在の婦人語で、名詞のみに関して言うならば、すべてに丁寧語の「お」を冠する主潮に圧倒されているが、こうした風潮が既に室町時代から現われている事は、例えば、^{註2}日葡辞書の用例から「お」を冠した語を拾い出してみると、それらの殆んどに「婦人語」と断っているのも明らかであろう。又、婦人語と小児語が極めて近接した関係にあるのは周知の事であり、それはいわば、カタコト、化への傾向である。古い時代の婦人語、所謂女房詞の中に、「文字ことば」があり、これには第一節で例にあげた、「ひともし」「ふたもし」なども含まれるが、多くはある名詞のカシラ一字に「もし」を付けて言うのである。現在でも僅かに残っている「かもじ」^{註4}「ゆもじ」「しゃもじ」などの類がそれで、今迄考察してきた一音節語名詞の多音節化とは逆に、音節そのものは二以上であっても、対象を表示する語は却って一音節化されている、この事實は、以上の多音節化の傾向が、一音節では意味を把握しにくいと考えられる理由のほか、何かあることを示しているようである。そして、婦人語が「もしことば」によらぬ場合、その頭文字を繰り返す言い方をする傾向

があるのは、又歴史的にも証明しうること、これは、現在小児語にそのまま見られるのである。例をあげれば、

かか(母) かか(鱧節) ぞぞ(草履) せせ(銭) とと(父) とと(魚・鳥)

のの(神・月・仏) ばば(汚物) べべ(着物)

などそれであるが、これが元来の一音節語である場合も、同様の方式で二音節化している。そして、更に「お」を冠する事が多いのも、上記の例と同じである。即ち、

じじ(字) てて(手) なな(菜) めめ(目)

などがそれで、これは第一音節を長母音化して、「^{註6}キーキがわるい」というように発音する場合もある。私が第三節で、父^ナ↓父^ナ乳^マ↓乳^マの変化が、婦人語や小児語の面で行われたのではないか、と示唆したのは、これらの言葉が小児に直接した内容であるのと、以上の様式が、このように、ほかにもあるからである。

次に、所謂俗語の中で、一方で一音節語がそのままの生命を保ちながら、砕けた日常の会話では、愛称のように多音節化されている幾つかの群がある。

なっぱ(菜) はっぱ(菜) わっぱ(輪) ねっこ(根) しっこ(尿) しっぱ(尾)

おっぱ(尾) たんぼ(田)

などがそれである。なっぱは菜の葉、しっぱは尻尾、であろうし、はっぱやわっぱはへへやへへの反射的な繰り返し、しっことは尿↓尿に、ねっこのこのような愛称的な、を添えたもの、などと考えられるが、たんぼは田圃として相当固定した語感を与えている。更に、これら砕けた言葉に連続するものとして、方言に注目してみよう、例えば、今の尾に関する各地の方言を、東条操氏の方言辞典で調べてみると、

おじ、おじり、おば、おばた、おばち、げんのは、ごっほ、しりお、しりご、ずー、では、どうー、へんば

など多数があげられる。即ち、元来の固有の音節である「ヲ」が残ったままで、複合的に多音節化している場合が多いのに気付くであろう。方言の語源には、説明のつかない、証明しにくい言葉も多いのであるが、一音節語の名詞が、やはり地方に於ても敬遠されて

いる様子が察せられる。参考までに、他の例も少しあげておこう。

○か(蚊) ↓がざん、がじゃみ、かっぱ、かとんぼ、かな、かの、がんじゃー、かんす、よが、

○け(毛) ↓けば、けぶく、ひげ、

○じ(字) ↓じーろ(児)、いーろ、

○た(田) ↓おきの、くな、たえ、たんなか、はだ、あが、たば、たばる、

○ひ(日) ↓あたさん、あとてさま、あなたさま、おてだ、こんにちさま、ちんだ、てーだ、てだ、ていら、とだいさま、とどてさ

ま、にちりんさん、にってんさま、によらいさま、ひごーさま、ひもと、もったいさん、おっさま、おひさん、てんび、ひやし

○め(目) ↓めつら、めのす、めどこだま、めなこ、めのこだま、めんばち、めだくだま

○め(芽) ↓しんほえ、ばい、ふき、めご、めど、もえ、もえず、めじょ、いじょ、めーじょ、めはり、

○も(藻) ↓がーもく、ごもく、むく、もく、ごも、もっぱ、

○わ(輪) ↓こま、はま、わんごろ、わざ、

以上のほかにも、まだ類例はあげられるが、これらを手細に検討していくと、言葉のなり立ちや、変化のしくみの諸相が色々明らかになって、興味ある問題を提示してくれるであろうが、今は、余りに方言に深入りする事から離れようと思う。そして、一通り見渡しただけでもわかったように、中には、元来の一音節語とは発生的に異り、単に多音節化したというのでは説明のつかない語が含まれているのである。例えば、「酔^ム」では

あまぎぎ、あまひ、おはいり、きたかせ、こめじ、さげ、はいりー、あまみ、あまん、

などが各地方で使われており、の中には、酔^ムプラスX、なる形の語が含まれていない。しかしここでも、酔^ムという一音節語が使用されていない点、氷^ヒ氷^ヒと同じように、やはり一つの多音節化が行われていると見てよい。又、方言に於て、文字の上では一音節語であっても、長母音化して二音節に発音している場合があるのは、京阪地方を歩いた者ならば、誰も耳にしているに違いない。蚊^カ木^キ戸^コといった具合で、徳島を中心に、関西の相当広い範囲にわたって行われている事は、又方言地理学の教える所であり、ここに

も多音節化の一例を見るのである。

- 註1 俗語とは元來雅語に対するが、所謂雅語の衰退と共に、現今ではその区別が次第に失われてきた。ここでは俗語とか婦人語とか、改めて定義づける事は省略して、普通そう呼ばれている一群を、テクニカツ・タームとして用いるにとどめる。
- 註2 日葡辞書は、断るまでもなく、慶長八年（一六〇三年）長崎で刊行された、来日宣教師の伴天連や伊留満達のための、ポルトガル語での日本語辞書である。故に、室町末期から江戸時代初期へかけての言語を知る上での重要資料であるが、ここでは、一八六八年にパリで刊行された、その訳本であるバヂェスの日仏辞書を以て、便宜的に日葡辞書に代えるものである。以下本稿で日葡辞書とあるのは、日仏辞書を見ての事であるのを諒とせられたい。両書の間に注意すべき異同がある事は、土井忠生氏の詳しい報告がある。
- 註3 *parole feminine; expression feminine:*
- 註4 「じゃもじ」以外の前二語は、一部の社会を除いては次第に使用されなくなっている。説明するまでもないが、「かもじ」は元來髪の意味から、まげを結う時の添え髪の意味になり、「ゆもじ」は湯具である。「かもじ屋」と呼ばれる商人も、普通の街なみから殆んど姿を消した。
- 註5 この中で、鰻、魚は日葡辞書で、尿、草履、生米、酒などと共に婦人語に指定され、父は、小児語のように (*Mot dont se servent les enfants;*) 指定されている。
- 註6 病氣のことで、ハキVは氣である。
- 註7 父母の呼称は、歴史的にも、地域的広がりの中でも、同一音節を連続せる場合が多い。
- 父じし、だだ とと *ちやちや* のの *てて* (*ハハ*)
母じかか たた *だだ* *なな* *ちやちや* (*ママ*)
などが、古語辞典、方言辞典から拾い出せるが、更に言えば、中国語でも、爸爸、媽媽、*ママ* と言う。
- なおこれとは別の方面で、例えば日葡辞書(日仏)の用例の中には、次のような一連の二音節語がある。
- Bobo* *ホボ* *Parties sexuelles de la femme* (*paroles dont se servent les femmes et les jeunes filles*)
Pefe *ペフ* *Parties sexuelles de la femme.*
Soso *ソソ* *Parties secrètes de la femme.*
- 隠語と呼ばれる一群の言葉の中には、これらとは別に、焦点をぼかす意味で一種のカタコト化が行われ、ある広がりを持っているが、婦人語との関係など、説明する用意がない。

以上述べ来たことで、一音節語の名詞が、時間のタテの流れに於ても、空間のヨコの広がりにも、多音節化の道を辿らされている事を知った。しかし又、他面、その傾向をはね返して、それは長い生命を保ち続けている事をも知った。後者では、使用頻度から解明を試みてみたし、前者でも、私は音韻上の問題があるような口吻を屢々弄してきたが、ありていに言えば、この方面で極めて知識の乏しい私には、ただ漠然とそう考えるだけで、秩序だつて解明する用意も勇氣も持ち合せていない。しかし、単に現象だけを提示してここで小稿を打ち切ってしまうというのも、何か無責任のようで、甚だ歯切れが悪い感じがするので、漠然としたなりで、私の考えを述べるべく、勇氣をふるい起そうと思つた。

日本語の音節構造の特質については、橋本進吉博士の周到な研究がある。博士はそれを

- (一) 國語の音節には原則として一つの母音が核心となっている。但し例外的に一つの子音から成るものもある。
 (二) 母音の前には一つの子音が附くのが常であつて、二つの子音が重なつて附く事もあるが、それは限られた種類のものであり、三つ以上の子音が附く事はない。

(三) 母音の後に子音の結合する事はない。

とまず概括せられ、更に詳細な検討を試みておられるが、その中で、國語の音節は母音で終る開音節(閉音節は子音で終る)を常とする事、又外國語に見られる一音節内の二重母音乃至三重母音の存在が許されない事などを指摘されている。これを私流に平たく言えば、単独母音から成る開音節は、まず音節の性質からみて甚だ単純になり、音節と音節の区切れをはっきりさせる傾向を持つのである。私どもは、子供の頃、上から読んででも下から読んで同じになる、〈シンブンシク〉などの言葉を教わつて面白がつたものであつたが、やがて英語を習いはじめ、ローマ字で〈shinbunshū〉と書けるようになって、それを逆に読もうとする、〈シンブンシク〉にならないばかりか、なんとも発音のしようがなくて、当惑したものである。即ち、開音節を逆に読めば閉音節になる仕組みで、〈Akasaka〉のように、母音で始まり、同一母音を繰り返せば、逆読みにしても同じになるが、それも仮名に書き改めれば、元通りにはならない。これは、閉音節の多い欧米語と國語との大きな違いで、有坂秀世博士の紹介される所によると、フランスでは、一単語内の音韻論的音節の切れ目について、學者間で屢々議論が行われる程であるという。そして、國語が音節の切れ目を明瞭にしている点では、仮名とい

う表記法とあわせて、一音節の名詞の存在を、甚だ有利に導いていると考えられる。

次にこれを、一音節語を基調とする言語で、開音節を原則とし、故に音節の切れ目の又明瞭な中国語と比較してみよう。音韻上、まず両者の大きく相異なる点は、中国語では、二重母音、三重母音を含む音節が甚だ多い事であろう。脚 (chiao) 海 (hai) 帥 (shuai) などがそれで、中国語の音を正しく取り入れようと努めた上代を経て、やがては日本式に、二音節の音にしたり、単一母音の語を訓として、あたかも日本語のように同化^{註1}したのであった。中国語の音節構造は斯様に複雑であつて、加えてアクセントの所謂四声、有気声無気声の区別などがあるから、その総数は四百を越えるであろうが、日本語では、中古で、いろは歌なら四十七音、あめつちの歌なら四十八音に、濁音二十、これに拗音を加えても、たかだか八十程度^{註2}で、両者の相異は、非常に大きいと見ねばならない。又、アクセントの点についても、日本語は、強弱(高低)の二段の区別しか持たないので、方式の点から単純である上に、開音節で切れ目が良いから、一音節の語では、他の語との関係で見るとはかばかではない。「火が出た」「日が出た」の場合、前者は火に、後者はガにアクセントがかかると説明出来ても、火と日を取り出してしまえば、強弱高低といった処で相対的な事だから、両者の識別は容易ではない。もし同音異語がなかったとしても、この不便さは消えるものではなく、一音節語は、とかくコト、バとしてよりも、オトとしてまず聞えてしまう。試みに前にあげた高頻度広範囲十五語を、人に読んで、どの位相手がわかるか調べてみると良い。木 子 手 戸 名 根 音 葉 日 火 身 目 夜 世 絵 をそのまま読んで、相手は必ず一寸待ってくれと言うに違いないし、読み手も、生えてる木、子供の子、おてての手、ドアの戸、名前の名、根っここの根、オトの音……などと、説明を加えたくなるものである。短い、点のような一音節語が、小兒語や婦人語に於てとかく多音節化したり、言い換えられたりするのも、肯ける事であろう。即ち、一方で、国語の音節構造が単音節の独立を助長する反面、そこから更に音節数のきつい制約を受けるという、一音節語名詞の矛盾した両面が、現象面と同様、音韻面でも示されるのではないかと思う。

次に、奈良時代から平安時代にかけて、前の資料だけからの帰納によると、一音節語名詞に大きな消長のある事が指摘され、私はそれに受難時代という表現を敢てしたが、確かに消長を認めうるかとの資料面の再検討や、それが確認された上で、如何なる事情がそこに介在したかの考察は、残念ながら、私の側で全く進捗していない。それには、平安時代に入って消えたか、変化した一語一語を、更

に資料の範囲を広げて、あくまで追及していく方法が考えられ、それによってのみ立証も可能であろうが、もう一つ、外部的な要因、即ち時代の動きを無視する訳にはいかなない。平安遷都という政治上の大事業も言語生活に深くからみ合っているし、国語史にひきつけて考えても、この両時代にまたがる変動には、実に画期的な事があった。今はそれらの一二を示して、参考とするにとどめるが、第一は音韻である。上代の特殊仮名遣の研究や、音韻史の研究が進むにつれて、当時の音韻論的音節の内容や数量が論じられ、次第に明らかになってきたが、この一音節語名詞にのみ関して重要なことは、音節数が平安時代に入って少なくなった点であろう。ここで改めて考え直さねばならないのは、奈良時代から平安時代にかけて消えた一音節語名詞があるという事以上に、平安時代に入って新たに生じた和語としてのそれが殆んどない点である。消長と言っても、消のみあって長がないのである。仮説であるが、私はこの理由を次のように考えている。亀井孝先生の言われるように、「経済」という点のみから言えば、語構成の資材として、一音節語は最も経済的能率的に使われる可能性が多い」のであり、言語の起源からみても、短い音節の語から多い方向へと向ったであろうから、日本語のように音韻上区別しうる音節数の少い言語にあっては、既に奈良時代（もっと古い時代をこめて）に於て、飽和状態、乃至は過剩状態になってしまったと見て良いのではなからうか。それに加えて、音節数の減少である。細かい検討は省いて、大ざっぱな計算を試みよう。奈良時代三作品のみに例を見て、以下の六作品に例を見ない語が五六語あるのは既に述べたが、これを形式的にすべて消失語と仮定すると、五十音図の区別で分けて、次のような分布を示す。

アー2、エー1、カー1、キー3、ケー3、クイー1、コー2、シー2、スー2、セー3、チー1、ゾー1、トー4、ナー3、ニー2
ヌー2、ヒー4、ヘー4、ホー2、マー1、ミー1、メー1、モー3、ヤー1、キー1、ラー5、計五六語。

そして、石塚竜麿が示した上代で両類に別れる十五語（うち、ちこもは古事記のみ）、え、き、け、こ、そ、と、ぬ、ひ、へ、み、め、よ、ろ、ち、も、が占める割合を五六語の中で求めてみると、*印を付した合計の二九語、過半に当るのである。勿論、これだけで、奈良―平安の音韻数の整理が影響を与えたとは言えないが、出発点の見通し程度にはなるであろう。

第二は、草仮名の発達と女流文芸の隆盛である。紙幅の都合で多言はしないが、仮名が原則として表音記号であるという事は、一音節語名詞が読んで区別しにくかった先の実験を思い合せれば、推論の手がかりとなるろうし、特に音読されたとみられる物語類を考える

のも、重要であろう。そして、これは平安の中期を俟たねばならないが、女流の手になる事も、無視しては考えられない。

ところで、奈良平安の時代の推移に、新たに加えられた一音節語名詞はないかという点、これも資料を形式的に処理した結果では相当であるのである。即ち、消えた語彙数の五六語より多く、八〇語が増加分として指摘されるが、私が先に、和語としては殆んどない、と断つたように、この殆んどは漢字の字音語、借用語である。医^イ 馬^マ 可^カ 賀^ガ 綺^キ 季^キ 義^ギ 驥^キ 句^ク 具^ク……などがそれで、字音語という事になれば、奈良時代の資料は更にそろえ直す必要がある。万葉集と日本書紀は、和歌、歌謡であり、古事記も訓読によるのだから、字音語が少ないのは当然で、漢字を摂取した奈良時代に、これの劣ろう筈がない。ただ、実作品の上で借用語が次第に出てきて、以上の資料から言えば、徒然草に於て最も大きな位置を占める現象は、かなり注目する必要がある。大言海に解説されている一音節語名詞が、五一九語にのぼる事は既に述べたが、その大部分が借用語である事は、漢字がどういう理由で仮名文に組み入れられたのかを、良く説明するものである。一音節語は読んでは意を握みにくかったが、漢字で示せば、一目瞭然として余す所がない。一音節語の同音異語は音韻上きつい制限を受けるが、漢字となれば、制限がない。加えて、漢字には、一字一字、その本来の性質からある意味を持ち、場合によっては、深遠な思想的背景を持つ事すら多いから、簡にして要を極めるに基だ便である。かの日葡辞書にしているから、一三二語の一音節語名詞のうち、過半を借用語の解説に当てているのである。

予定の紙数を越え過ぎたから、標題の、一音節語名詞の、これからの運命について結論を急ごう。源氏物語では、世^ヨという名詞が、実に一三二六語も出てくる。源氏がいかにも大作をまこしても、名詞で一作品にこれ程の用例があるのは、いかなる理由にもせよ、他に類がない。これは単にこの一例、一作品にとどまるのでなく、時代も内容も形式も異つた各作品を比較してみた所でも、頻度の高い語はほぼ一定して、抜群の用例を示している。日本語の、一音節をどこからでも容易に抜き出しやすいという音韻上の性質を、裏側から見れば、どこへでも容易に入り易い性質ともなる訳で、源氏物語に世^ヨが頻出するからとて、決して目ざわりにも耳ざわりにもならないのである。そして、頻出をさまたげない、即ち高頻度を保つ故に、一音節語名詞は強靱な生命力を持ち、将来にわたつても持ち続けるであろうと言えるが、借用語については、別の運命を辿らされる可能性が強い。それは、事の良否は姑く措き、戦後に制度として行われ、なお推進されようとしている漢字の制限である。それは借用語の消長に直接比例するが、漢字を日本語から追放しきれるか否か

に、この運命はかかっている。戦前と戦後を比較しただけでも、それら借用語の多くは、消え去らないまでも、稀用の彼方へと押しやられた。そしてこの程度が、現在の時点で適当であるのか、将来にわたっても進むべきなのか、単に運命という流れに任せるだけでなく、なお考えたいと思うのである。

なお、国語学史上、所謂音義説をとる中で、特に一音一義説を奉ずる橋守部の考えを取りあげて、更に検討を加える用意であったが、他の述べ残した事と共に別の機会に譲りたい。

註1 例えば、馬(uma)は、音としてはバとなったが、ハウマVはその多音節化であろう。これは同じ舶来生物の梅(ume)にも言える事で、ハウメVも又そうである。なお、音で、何故バ行音に変わったかの説明は、省略したい。

註2 上代では更に多く、清濁合せて、八十七語程が想定されている。勿論、拗音を含めない計算である。

註3 仮名は本来表音記号そのものであるが、それによって当時のすべての音が表記されたとは限らず(撥音、拗音、濁音)、又、仮名のすべてに対応する異った音があるとは限らない点で、「原則として」とした。

註4 音義説は古くは室町時代から唱えられたが、近世に入って活況となった。特に一音一義説をとる者は、この守部をはじめ、宮樫広隆、堀秀成や所謂言霊派の、高橋残夢、林圀雄などがあげられる。橋守部の「助辞本義一覽」の冒頭を、参考まで少しあげておこう。

「はの音には、刃、齒、葉、羽、端、などの如く、物を切り分ち離つ意の一統あり。はの音して云詞の上に、離、放、擲、扱、掀、搨、散等の類多かるも、此故なり。……又此はに、歎息の一統あるは、あ行と同じ喉音のゆゑ也。そはあの音にて、ああと歎くを、又はの音にて、も、はれマアと、歎く事のあるが如し。即此ああと、はれと二つ相重りて、歎息の言に、あはれとは云也。……」
即ち、一音ごとに五統の義ありと説いて、すべての語をそれで解明しようとするのである。

○使用辞書、索引類、及び参考書目

A 用語索引

高木市之助編「古事記大成第七〜八巻索引編」、大野晋著「上代仮名遣の研究附録書紀索引」、正宗敦夫著「万葉集大成十五〜十八巻索引編」、山田忠雄編「竹取物語総索引」、西下経一他編「古今集総索引」、吉沢義則他編「源氏物語用語索引」、佐伯梅友他編「紫式部日記総索引」、東節夫他編「更級日記総索引」、時枝誠記編「徒然草総索引」

B 辞書

正宗敦夫編「倭名類聚鈔索引付」、京大國語教室編「箋注和名抄索引付」、パヂェス「日仏辞書」、村田了阿著「俚言集覽」、大槻文彦著「大言海」、東條操著「全国方言辞典」及び「標準分類方言辞典」、新村出編「広辞苑」、金田一春彦編「古語辞典」、国語学会編「国語学辞典」等。

C 参考書

橋本進吉著「国語音韻の研究」「文字及び仮名遣の研究」、亀井孝著「Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese」、有坂秀世著「国語音韻史の研究」「上代音韻攷」、今泉忠義著「国語学概論」、金田一春彦著「日本語」等

嘗て浜松中納言物語の総索引を作成した折、もう二度とこうしたことはすまいと思ったのであったが、唐物語の校本を「鶴見大学紀要(第十一号)」に掲載したあと、急に、系統別の語彙構造に相異があるかどうか調べたくなり、昨夏、短い作品でもあったので、あい間を見て作ってみた。索引は案外あっさりできたが、整理に手間どり、あれこれと集計処理を加える程見通しがわるく難航した。索引は作るからには公刊した方が便利だと最初から思ったものの唐物語のような特殊な作品で、なおかつ、系統分けをした索引を提供する以上、作成者の側で基礎的検討はしておいた方がよいと考えたのである。結局、当初の期待に反して、とりとめのないことになったが、ある作品の語彙論上の一資料として、視座が異なれば、あるいは役立たないでもないと思って、整理した資料とともに、その経過を述べることにした。

また、ついだと申して恐縮ながら、唐物語に直接関係がないのに、旧稿「一音節語の名詞の運命」を更に付載した。大学院の学生時代、亀井孝先生の講筵に列し、題を賜わって提出したりレポートをその後「芸文研究(第十三号)」に発表してから既に十四年経った。ただ、語彙の頻度と、用例が及ぶ作品数との関係などをはじめ、語彙の計数に対する愚考に関しては、今回の「唐物語の語彙について」と深い係わりがある。当時は、刊行されている総索引も乏しく、読み返すと改めたいところも多い上、元来リポートであったからか、なくもがなの注などが多くて赤面するが、私にとってなつかしい旧稿と言え、また新たに組み直して、本の値段をつり上げるのも本意ではないので、そのままリプリントしてもらおうことにした。語学がかった論文は、これからあまり書きそうに

ないと思つたのも、併せ録した理由の一つである。

「唐物語校本ならびに総索引」と標題しながら、お入用でもない拙論一篇を添えた次第を記し、お詫びに代える。

編者